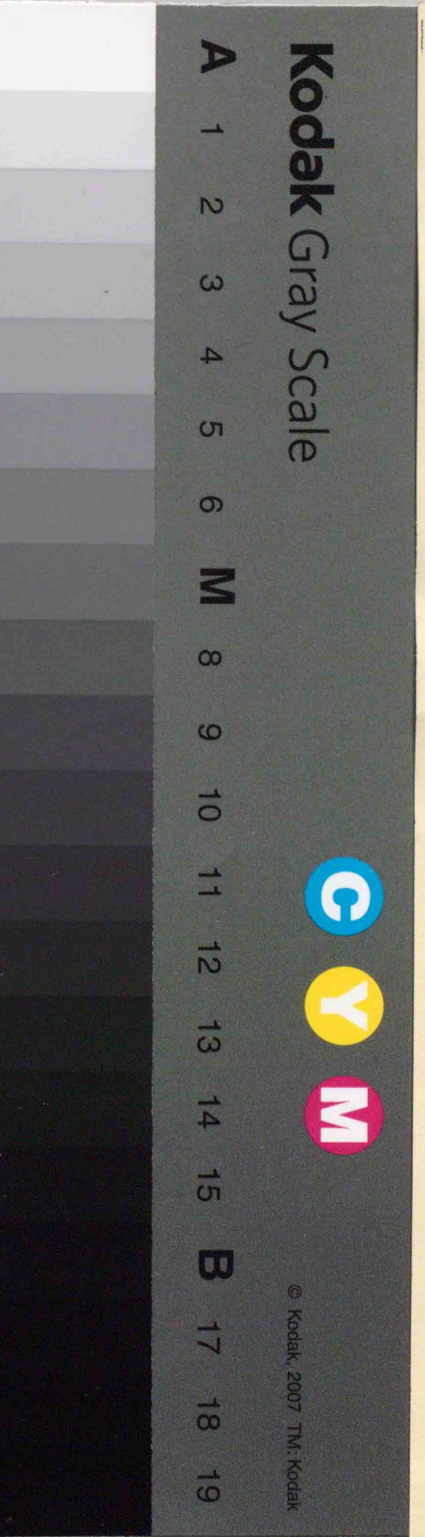
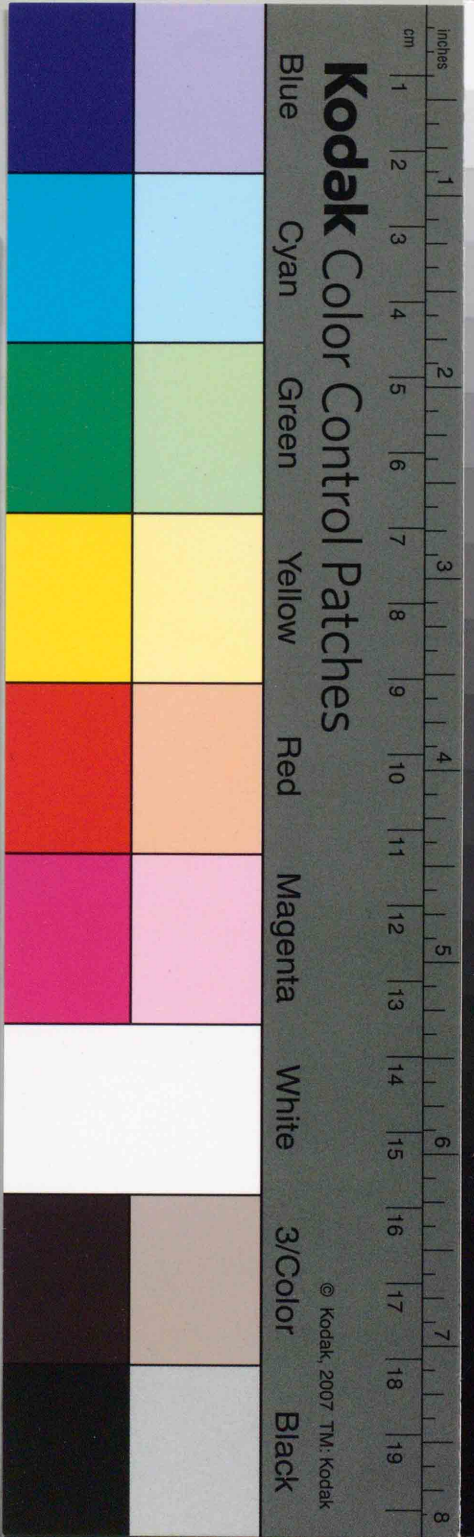


中等國文讀本
落合真文編
卷十



375.9
0c8
資料室



30306
教科書文庫
3
810
41-1899
20003
01461
M32
1899



3759
0c8

第10號
10,10

中等國文讀本卷十目次

增鏡

新島守

むら時雨

大鏡

左大臣時平

小一條院

太政大臣道長

榮花物語

浦浦のわかれ

中等國文讀本卷十

廣島大學
圖書部



古今集

新島大學圖書印

中等國文讀本卷十

增鏡

新島守

四月廿日、帝順德ありさせ給ひ、春宮、四つにならせ給ふに
 譲り申させ給ふ。近比、皆、この御齡にて、受禪ありつれば、こ
 れもめでたき御行末ならむかし。おなじき廿三日、院號の
 さだめありて、今、ありさせ給へるを、新院ときこゆれば、御
 兄の院土御院をば、中院と申し、父みかど後鳥羽院をば、本院とぞ
 きこえさする。このほどは、家實のおとど普賢寺殿の御子、關白にて
 おはしつれど、御讓位の時、大臣道家のおとど光明峰寺殿攝政

になり給ふ。かのあづまの若君頼經の御父なり。
さても、院のおほしかまふること、志のふとすれど、やうや
う、漏れきこえて、ひがしざまにも、その心づかひすべかめ
り。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふものあり。か
つがつかれを御勤じのよし仰せらるれば、御方にまゐる
つはものども、おしよせたるに、のがるべきやうなくて、腹
切りてけり。まづ、いとめでたしとぞ、院はおほしめしける。
東にも、いみじうあわてさわぐ。さるべくて、身のうすべき
時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ
時に、はかなきさまにて、屍を曝さじ。おほやけと聞ゆども、
みづからまたまふことならねば、かつは、わが身の宿世を

も見るばかりと思ひをりて、おとうどの時房と、泰時とい
ふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて、都に
のほす。泰時を前にすゑていふやう、おのれを、このたび、都
にまゐらすは、思ふところ多し。本意の如く清き死にを
すべし。人にうしろ見えなむには、親の顔、また、見るべから
ず。今をかぎりと思へ。いやしけれども、義時、君の御ために
うしろめたき心やはある。されば、横さまの死をせむこと
はあるべからず。心をたけくおもへ。おのれ、うち勝つもの
ならば、二たび、この足柄、箱根はこゆべしなど、なくなくい
ひきかす。誠に志かなり。又、親の顔、をかまむ事もいとあや
ふしと思ひて、泰時も、鎧の袖を志ぼる。かたみに、今やかぎ

りと、あはれに心細げなり。かくて、うち出でぬる又の日、思ひかけぬほどに、泰時、ただひとり、鞭をあげて馳せきたり。父、むねうちさわぎて、いかにと問ふに、軍のあるべきやう、大かたのおきてなどは、仰のごとく、その心をえ侍りぬ。もし、道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく、鳳輦を先だてて、御旗をあげられ、むかうのげんぢうなる事も侍らむに、まゐりあへらば、その時の進退、いかが侍るべからむ。この一ことをたづね申さむとて、ひとり走せ歸り侍りきといふ。義時、とばかりうち案じて、かしこくも問へるをのこかな。その事なり、まさに、君の御輿に向ひて、弓をひくことは、いかがあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をき

りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせたてまつるべし。さはあらで、君は、都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも、戦ふべしと、いひもはてぬに、いそぎ立ちにけり。

都にも、おぼしまうけつる事なれば、ものふども召しつどへ、宇治、瀬多の橋もひかせて、かたきを防ぐべき用心ことなり。公經の大將ひとりのみ、御うまごのことも、さる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は、故大將のはらからなれば、一かたならず、あづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕き事と、あぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納

言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又、修明門院の御はらからの、甲斐の宰相中將範茂など、つぎつぎあまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじりたつ人人、この外の上達部にも、殿上人にも、あまたありき。御修法ども數えらず行はる。やむごとなき顯密の高僧も、かかる時こそ、たのもしきわざならめ。おのおの、心をいたしてつかうまつる。御みづからも、いみじうねんせさせ給ふ。日吉の社にまのびて詣でさせ給へり。大宮の御まへに、夜もすがら、御念誦し給ひて、御心のうちに、いかめしき願どもを立てさせ給ふ。夜すこしふけ静まりて、御社すぐく、燈籠の光、かすかなる程に、幼き童の臥したりけるが、俄に、

おびえあがりて、院の御前にただまゐりにはしりまゐりて、託宣しけり。かたじけなくも、かくわたりおはしまして、うれへ給へば、聞きすごしがたく侍れど、一どせの御興ぶりの時、なさけなく、防がせ給ひしかば、衆徒、おのれを恨みて、陣のほりにふりすて侍りしかば、むなしく、馬牛のひづめにかかりし事は、今に、怨めしく思ひ給ふるにより、このたびの御方人は、えつかうまつり侍るまじ。七社の神殿を、黄金まろがねにみがきなさむと、うけたまはるも、もはら、承け侍らぬなりと、のしりて、いきも絶えぬるさまにて伏しぬ。きこしめす御心ち、物に似ず、あさましうおぼさるるに、ただ、御涙のみぞいで來る。過ぎにしかたくやしう、

とりかへさまほし。さまさま、怠りかしこまり申させ給ふ。山の御輿、防ぎたてまつりけむこと、かならずしも、御みづからおぼしよるにはあらざりけめど、責、一人にといふらむ事にやど、あぢきなし。中院は、あかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそものしたまはねど、世のいと心やましきままに、かやうの御さわぎにも、殊に、まじらひたまはざめり。新院は、おなじ御心にて、よろづ、いくさの事なども、掟ておほせられけり。

いつのとしよりも、五月雨はれまなく、富士川、天龍など、えもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も、うちわたしがたければ、攻めのほる武者どもも、あやしくなやめり。かかれ

ども、遂に、都にちかづくよし、きこゆれば、君の御武者もいでたつ。その勢、六萬餘騎とかや。宇治、瀬多へ分ちつかはす。世の中、ひびきののしるさま、言の葉もおよばず、まねびがたし。あるは、ふかき山へ逃げこもり、どほき世界に落ちくたり、すべて、やすげなく騒ぎみちたり。いかがあらむと、君も御心みだれておぼしまどふ。かねては、たけく見えし人も、誠のきはになりぬれば、いと心あわただしく、色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月廿日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂に、みかたのいくさやぶれぬ。あら磯に、たか潮などのさしくるやうにて、泰時と、時房と、みだれ入りぬれば、いはむかたなくあきれて、上下、ただ、物に

ぞあたりまどふ。

あづまよりいひおこするままに、かのふたりの大將軍はからひおきてつつ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷したてまつるべしときこゆれば、女院宮宮所所におほしまどふ事さらなり。本院は、隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ綱代車のあやしげなるにて、七月六日いらせ給ふ。けふをかぎりの御ありき、あさましう哀なり。ものもがなやど、おほさるるもかひなし。その日、やがて、御ぐしおろす。御とし四そぢに一つ二つやあまらせ給ふならむ。まだ、いとをしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して、御すがたうつしかかせらる。七條院へたてまつらせ給はむ。

となり。かくて、おなじ十三日に、御舟にたてまつりて、遙なる波路を去のぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおほされず。いにしへ、いかなりける、代代のむくいにかど、うらめしく、新院も、佐渡國にうつらせ給ふ。まことや、七月九日、帝仲恭天皇をもおろしたてまつりき。この卯月かどよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にて、おろし給へるためしも、これや始めなるらむ。もろこしにぞ、四十五日とかや、位におはする例ありけるとぞ、からのふみ讀みし人のいひし心ちする。それもかやうの亂やありけむ。さて、上達部殿上人、それより下はた、残るなく、この事に觸れにしたぐひは、重く軽く、罪にあたるさま、いみじげ

なり。中院ははじめより志ろしめさぬ事なれば、あづまにもどがめ申さねど、父の院、遙にうつらせ給ひぬるに、のどかにて、都にあらむ事いとおそれありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國の幡多といふ所にわたらせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、わか宮いでき給へり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くてうせ給ひにし人のむすめの御はらなり。やがて、かの宰相のおとうとに、通方といふ人の家に、とどめたてまつり給ひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ、御どもつかうまつりける。いとあやしき御手輿にて、くだらせ給ふ。みちすがら、雪かきくらし、風ふきあれ、ふぶきし

て、來しかたゆくさきも見えずいと堪へがたきに、御袖もいたくこほりて、わりなきこと多かるに、

うき世には、かかれとてこそ、生れけめ。

ことわり知らぬ、わがなみだかな。

せめて、近き程にと、あづまより奏したりければ、後には、阿波國に遷らせ給ひき。

さて、このたび世の有様げに、いと、うたてくちをしきわざなり。あるは、父の王をうしなふためしだに、一萬八千人までありけり。とこそ、佛も説き給ひためれ。まして、世くだりてのち、もろこしにも、日の本にも、争ひて戦をなすこと、數へつくすべからず。それも、皆、ひとふし二ふしのよせはあ

りけむ。もしは、すぢことなる大臣、さらでも、おほやけどもなるべききざみの、すこしのたがひめに、世にへだたりて、その恨のすゑなどより、事おこるなりけり。今のやうに、むげの民とあらそひて、君のほろび給へるためし、この國には、いとあまたも聞えざめり。されば、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも、皆たけかりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に、崇徳院の世を亂り給ひしだに、故院後白河院の御位にて、うちかち給ひしかば、あまてらす大御神も、御裳濯川のおなじ流と申しながら、なほ、時のみかどを守りたまはすることとは、つよきなめりとぞ、ふるき人人も聞えし。又、信頼の衛門督、おほけなく、二條院をおびやかしたてま

つりしも、遂に、空しき屍をぞ、道のほとりに棄てられける。かかれば、ふりにし事を思ふにも、猶、さりとも、いかでか、三皇、今上、あまたおはします王城の、徒に、ほろぶるやうやはあらむと、たのもしくこそおほえしに、かく、いとあやなきわざの出できぬるは、この世一つのことにもあらざらめども、まよひのおろかなるまへには、猶、いとあやしかし。四つにて位につき給ひて、十五年おはしましき。おり給ひて後、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ、天の下にはおなじ事なりしかば、すべて、三十八年が程、この國のあるじとして、萬機のまつりごとを、御心ひとつにをさめ、百の官を志たがへ給へりし。そのほど、吹く風の草木をなびかすより

も、まさされる御ありさまにて、遠をあはれみ、近をなでたまふ御めぐみ、雨のあしよりもまげければ、津の國の、こやのひまなきまつりごとをきこしめすにも、難波のあしの亂れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松も、やうやう、枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞のほらの御住居、いく春をへても、そらゆく月日のかぎりまらず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありて、よしなき一ふしに、今はかく、花の都をさへたちわかれ、おのがちりぢりにさすらへ、磯のとまやに軒をならべて、おのづから、ことどふものとは、浦につりするあま小舟、まほやく烟のなびくかたをも、わがふる郷の志るべかどばかり、ながめ

すごさせ給ふ。御すまひどもは、それまでと、月日をかぎりたらむだに、あすまらぬ世のうしろめたさに、いと心ほそかるべし。まして、いつをはてどか、廻りあふべきかぎりだに、なく、雲の浪、けぶりの浪の、いくへどもまらぬ境に、世を過し給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします所は、人ばなれ、里遠き、ままの中なり。海づらよりは、すこしひき入りて、山かげにかたそへて、大きやかなるいはほの、そばだてるをたよりにて、松の柱に、あしふける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に、柴のいほりの、ただ、まばしど、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたに、なまめかしく、ゆゑづきて、まなさせ給へり。水

無瀬殿おぼし出づるも、夢のやうになむ。はるばると見や
らるる海の眺望、二千里の外ものこりなき心ちする、今さ
らめきたり。志ほ風のいとこちたく吹き來るをきこしめ
して、

われこそは、にひ島もりよ。おきの海の、

あらきなみ風、こころして吹け。

おなじ世に、またすみのえの、月や見む。

けふこそよそに、おきの島もり

年も歸りぬ。所所うらうら、あはれなることをのみおぼし
なげく。佐渡院、あけくれ、御行をのみ志給ひつつ、猶、さり
もとおぼさる。隠岐には、浦よりをちのはるばると霞みわ

たれるそらをながめ入りて、過ぎにし方、かきつくし、おも
ほしいづるに、ゆくへなき御涙のみぞとどまらぬ。

うらやまし。長き日かげの、春にあひて、

志ほ汲むあまも、袖やほすらむ。

夏になりて、かやぶきの軒ばに、五月雨の志づく、いと所せ
きも、御覽じなれぬ御心ちに、さまかはりてめづらしくお
ぼさる。

あやめふく、茅が軒端に、風過ぎて、

志どろにおつる、むら雨の露。

はつ秋風のたちて、世の中、いとど、物かなしく、露けさまさ
るに、いはむかたなくおぼしみたる。

故郷を、わかれ路におふる、葛のはの、

秋は來れども、かへる世もなし。

たどしへなくながめ志をれさせ給へる夕ぐれに、沖のか
たに、いとちひさき木の葉のうかべると見えて漕ぎくる
を、あまの釣舟かと御覽ずる程に、都よりの御せうそこな
りけり。墨染の御ころも、夜の御ふすまなど、都の夜さむに
思ひやりきこえさせ給ひて、七條院より參れる、御ふみ、ひ
きあけさせ給ふより、いとみじく、御むねもせきあぐる
心ちすれば、ややためらひて見給ふに、あさましくも、かく
て月日へにける事、けふあすとも志らぬ命のうち、今一
たび、いかで見たてまつりてしがな。かくながらは、死出の

山路もこえやるべうも侍らでなむなど、いとおほくみだ
れかき給へるを、御かほにおしあてて、

たらちねの、消えやらで待つ、露の身を、

風よりさきに、いかでとはまし。

八百よろづ、神もあはれめ、たらちねの、

われ待ちえむと、たえぬ玉のを。

初雁のつばさにつけつつ、ここかしこより、あはれなる御
消息のみ、常はたてまつるを、御覽ずるにもあさましう、い
みじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は、新古今の撰者
にも召し加へられ、大かた、歌の道につけて、むつましくめ
しつかひし人なれば、よるひる、戀ひきこゆる事かぎりな

し。かの伊勢より須磨にまゐりけむも、かくやとおぼゆる
まで、巻きかさねて、かきつらねまゐらせたる、和歌所の昔
のおもかげ、かずかず、に、わすれがたうなど申して、つらき
命のけふまで侍ること、うらめしきよしなど、えもいはず、
あはれおほくて、

寢覺して、きかぬをききて、わびしきは、

あら磯なみの、あかつきのころ。

とあるを、法皇もいみじとおぼして、御袖いたく志ほらせ
たまふ。

浪まなき、おきの小島の、はまびさし、

久しくなりぬ。みやこへだてて、

木がらしの、おきの柚山、ふき志をり、

あらく志をれて、もの思ふころ。

をりをり、よませ給へる御歌どもを、かきあつめて、修明門
院へたてまつらせ給ふ。その中に、

水無瀬山、わがふる里は、あれぬらむ。

まがきはのらと、人もかよはで、

かざしをる、人もあらばや。言どはぬ、

おきのみやまに、杉は見ゆれど、

限あれば、さてもたへける、身のうさよ。

たみのわらやに、軒をならべて、

むら時雨

又の年の春、やよひのはじめつかた、花御覽じに、北山に行幸なる。その夏の頃、帝例ならずおはしまして、御薬の事なごきこゆ。いと重くのみならせ給ふとて、世の中あわてたるさまなり。時しもあれや、かの一とせ捕られたりし俊基を、また、いかにきこゆる事の、出できたるにか、搦め捕らむとまければ、内へ逃げてまゐるを、追ひ騒ぎて、陣のほとりまで、もののふどもうち圍みてのしれば、ごは何事と、ききわくまでもなし。いと物さわがしく、肝つぶれて、あるかぎり惑ひあへり。上も、物おほえ給はぬ御有様にて、大殿籠れるに、かかるよし奏すれば、いみじうおぼさる。遂に、又の日、六波羅へつかはしたれば、東へゐてくだりぬ。

うへは、御惱をこたらせ給ひて、いといやすからずおほす事まさされり。日ごろも、御心にかけてさせ給へる事なれば、速に、このあらまし遂げてむと、ひたぶるに、おほし立ちて、去のびて、ここかしこに、その用意すべし。

後の宮の御腹の、一品内親王、御うらにあはせ給ひて、ごぞの冬頃より、御清まはりありつる、けふあす、齋宮に居給ふ。八月廿日、まづ、河原へいでさせたまひて、やがて、野の宮にいらせ給ふ。その程の事ども、いみじうきよらなり。この御いそぎ過ぎぬれば、まづ、六波羅を御かうじあるべしとて、かねてより、宣旨に、またがへりしつはものどもを、去のびて召す。源中納言具行、とりもちて、こど行ひけり。

むかし、龜山院に、御子などうみたてまつりて、侍ひし女房、この比は、後の宮の御方にて、民部卿三位ときこゆる御腹に、當代の御子もいでものし給へりし、山の前座主にて、いまは、大塔の二品法親王尊雲ときこゆる、いかで習はせ給ひけるにか、弓ひく道にもたけく、おほかた、御本性はやりかにおはして、この事をも、同じ御心に掟てのたまふ。又、中務の御子のひとつ御腹に、妙法院の法親王尊澄ときこゆるは、今の座主にてものし給へば、かたがた、比叡の山の衆徒も、帝の御軍に、加はるべきよし奏しけり。

つつむとすれど、事ひろくなりければ、武家にも、はやう洩れききて、さにこそあなれど、用意す。まづ、九重をきびし

くかため申すべしなど、定めけり。かくいふは、元弘元年八月廿四日なり。雑務の日なれば、記録所におはしまして、人の訝ひうれふる事どもを、行ひくらさせ給ひて、人人もまた、君も本殿に、まばしうち休ませ給へるに、今夜、既に、武士どもきほひ参るべしとまのびて奏する人ありければ、とりあへず、雲の上を出でさせたまふ。中宮の御方へわたらせ給ひても、まめやかにもあらず、いとあわただし。

かねて、おぼし設けぬにはあらねども、事のさかさまなるやうになりぬれば、よろづ、うきうきと、われも人もあきれ居たり。かくて、内侍所、神璽、寶劔ばかりをぞ、まのびてゐてわたらせ給ふ。上は、なよらかなる御直衣たてまつり、北の

對より、やつれたる女車のさまにて、去のびいでさせ給ふ。かの二條院の昔も、かくやと思ひ出でらる。日ごろの御用意には、まづ六波羅を攻められむまぎれに、山へ行幸ありて、かしこへ兵どもを召して、山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべしと、定められければ、かの法親王たちも、その御心して、坂本に待ちきこえ給ひけれど、今は、かやうに、事たがひぬれば、あいなしとて、俄に、道をかへて、奈良の京へぞおもむかせ給ふ。中務の宮も、御馬にて、おひてまゐり給ふ。九條わたりまで御車にて、それより、帝も、かりの御ぞにやつれさせ給ひて、御馬にたてまつるほど、こはいかに去つる事ぞと、夢の心ちして、おぼさる。御ともに、按察

大納言公俊、萬里小路中納言藤房、源中納言具行、四條中納言隆資など、まゐれり。いづれも、あやしき姿にまぎらはして、くらき道をたどりおはする程に、げに、闇のうつつの心ちして、われにもあらぬさまなり。丑三つばかりに、木幡山過ぎさせ給ふ。いとむくつけし。木津といふわたりに、御馬とめて、東南院の僧正のもとへ、御消息つかはす。それより、御輿を参らせたるに、たてまつりて、奈良へおはしましつきぬ。ここに、中一日ありて、廿七日、和東の鷲峯山へ行幸ありけれども、そこもさるべくやなかりけむ、笠置寺といふ山寺へ、入らせ給ひぬ。所のさま、たやすく、人の通ひぬべきやうもなく、宜しかるべしとて、木の丸どのかまへをは

じめらる。これより、人人、少し心ちどりまづめて、近き國國の兵など召しにつかはす。

さて、都には、廿四日の夜、六波羅より、常陸守時知馳せ参りて、百敷の中をあさりさわぐ。その程人の曹司などに、おのづからおち残りたる女房の心ち、いはむかたなし。おはします殿を見れば、近き御厨子、御調度ども、何くれ、硯などもさながら、うちちりて、ただ今まで、おはしましけるあとと見えながら、宮人などだに一人もなし。女房の曹司曹司より、ひすましめく女のわらはなど、われさきにと走りいで、調度ども運びさわぎ、くづれいづる氣色ども、いとあさましく、めもあやなり。錦の几帳のうちに、いつかれましまし

つる後の宮も、何の儀式もなく、志のびてあわて出でさせ給ひぬれば、あたりあたりかきはらひ、時のまに、いとあさましく、御簾、几帳など、ふみまなき、ひきおとして、火の影もせず、ここもかしこもくらがりて、うち荒れたる心ちす。今朝まで、九重のふかき宮のうちに、いで入り仕へつる男女、ひとりどまらず、えもいはぬもの、ふどもうちちり、あらあらしげなるけはひ、つい松高くささげて、細殿、渡殿、なにくれ目蔭さしてあさりたる氣色、けうとくあさまし。世は憂きものにこそ、時のまに、げに心あらむ人は、やがて、修行の門出にも、なりぬべくぞおぼえぬ。中宮は、忍びて、野の宮殿の側にぞおはしましつきにける。宣房の大納言の二

郎、季房の宰相ばかり、御殿居にさぶらへり。廿五日のあけ
 ぼのに、武士どもみちみちて、帝のまたくめしつかひし、
 人人の家家へ、おし入りおしいり、捕りもてゆくさま、獄卒
 とかやの、あらはれたるかど、いとおそろし。萬里小路の大
 納言宣房、侍從中納言公明、別當實世、平宰相成輔、一度に、皆
 六波羅へゐて行きぬ。かやうの事を見るに、いとど、きも心
 もうせて、おのづからとりのこされたる人も、心ど皆かき
 けち、行き隠るるほどに、主なき宿のみぞおほかる。
 坂本には、行幸を待ち聞え給ひけるに、ひきたがへ、南さま
 へおはしましぬれば、そのよし、衆徒に聞かれなば、あしか
 りぬべし。まづ、とまれかくまれ、眞のおはしまし所を、あう

なく武家へ知らせじの、たばかりにやありけむ、花山院の
 大納言師賢を、山へつかはして、去のびて、帝のおはします
 よしに、もてないて、かの兩法親王、事行ひ給ひつつ、六波羅
 のつはものどものかこみをも防がせ給ふ。その日は、大納
 言も、大塔の前座主の宮も、うるはしき武夫姿にいでた
 せたまふ。卯の花緘の鎧に、鉞形の兜たてまつりて、大矢お
 ひておはする。妙法院の宮は、すずしの御衣の下に、萌黃の
 御腹巻とかや着給へり。大納言は、からの香染の薄物の狩
 衣に、けちえんに赤き腹巻をすかして、さすがに、蒔繪の細
 太刀をぞはき給ひける。六波羅より、帝、ここにおはします
 と心得て、武士ども多く参りかこむ。山法師も戦などして、

海東とかやいふつはもの、討たれにけり。事の初めに、ひんがし失せぬる、めでたしなどいふめる。かかれども、帝、笠置におはしますよし、程なく、聞えぬれば、はかられたてまつりにけりとて、山の衆徒も、せうせう心がはりしぬ。宮宮も逃げ出で給ひて、笠置へぞまうで行き給ひける。大納言は、都へまぎれおはすとて、夜深く、志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月、隈なく澄みわたりて、よせかへる浪の音もさびしきに、松吹く風の身に、きみたるさへ、とりあつめ心ほそし。

思ふ事、なくてぞ見まし。ほのぼのと、

ありあけの月の、志賀のうら波、

その後、辛うじてぞ笠置へはたどりまゐられける。かやうの事ども、例のはや馬にて、あづまへ告げやりぬ。ただ今の將軍は、むかし、式部卿久明親王とて、下り給へりし將軍の御子なり。守邦親王とぞきこゆる。相模守高時といふは、病によりて、いまだ若けれど、一とせ、入道して、今は、世の大事ども、いろはねど、鎌倉のぬしにては、あめり。心ばへなども、いかにぞや、うつつなくて、朝夕、好む事とては、犬くひ、田樂などをぞ愛しける。これは、最勝園寺入道貞時といひしが、子なれば、承久の義時より、八代にあたり。この比、私の後見には、長崎入道圓基とかやいふ者あり。世の中の大小事、ただ皆、この圓基が心のままなれば、都の大事、か

ばかりになりぬるをも、かの入道のみぞ、とりもちて掟て謀らひける。重き武士ども、多くのほすべしときこゆ。大かた、京も鎌倉も、さわぎののしる様、けしからず。承久の昔もかくやと、今更に思ひやらる。持明院殿には、春宮おはしませば、思ひの外に、めでたかるべき事なれど、けふあすは、いまだ、軍のまぎれにて、何のさたもなし。御宿直まゝの者の、うべうべしきもなくて、離れおはしますも、あぶなき心ちすれば、にや、せめても、六波羅ちかくとて、六條殿へ、本院後伏見院新院花園春宮、ひきつづきて、移らせ給ひぬれど、日にそへて、天の下さわぎ、おそろしき事のみきこゆれば、猶、これも危しとて、六波羅の北に、代代の將軍の御料とて、造りおける

檜皮屋ひとつあるに、兩院、春宮、參らせ給ふ。大かたは、いとものしきやうなれど、よろしき時こそあれ、かばかりの際には、何の儀式もなかるべし。

笠置殿には、大和、河内、伊賀、伊勢などより、兵ども參り集ふなかに、事の初めより、頼みおぼされたりし、楠木兵衛正成といふ者あり。心たけく、すくよかなるものにて、河内國に、おのが館のあるを、いかめしくまたためて、このおはしますところ、もし、危からむをりは、行幸をもなしきこえむなど用意しけり。あづまのえびすどもも、やうやう、攻めのほるよしきこゆ。もとより、京にある武士どもも、われさきにと、きほひ參る。木の丸殿には、さこそいへ、むねむねしき者

なし。いかになりゆくべきにかと、いともの心ほそくおぼ
しみたる。わが御心もての事なれば、かこつ方なけれど、故
郷の空も、あはれにおぼしいでらる。秋も深くなりゆくま
まに、山の木の葉のうち去ぐれ、谷のあらしのおどづるる
も、かたきのきほふかど、肝を消す御すまひ、いつしか御身
をかへたる心ちし給ふも、あぢきなし。

うかりける、身を秋風に、さそはれて、

おもはぬ山の紅葉をぞ見る。

すでに、東の武士ども、雲霞の勢にて、たなびきのほるよし
きこゆれば、笠置にも、いみじうおぼしさわぐ。もとより、い
どけはしき山の、深きつづらをりを、えもいはず、木戸、逆木、

石弓などいふ事ども、またためらる。さりとも、たやすくは
破れじと、たのませ給へるに、うしろの山より、御かたきく
づれまゐりて、木戸ども、焼きはらひ、おはしますあたりち
かく、すでに、烟もかかりければ、いまは、いかがせむにて、あ
やしき御姿にやつれて、たどりいでさせ給ふ。座主の法親
王澄御手をひきたてまつり給へるも、いとほかなげなる
御有様なり。中務の御子、大塔の宮などは、かねてより、ここ
をいでさせ給ひて、楠木が館におはしましけり。行幸も、そ
なたさまにやど、おぼし志して、藤房、具行、兩中納言、師賢の
大納言、入道、手をとりかはして、ほのほの中を、免れいづる
ほどの心ちども、夢とだに思ひもわかず、いとあさまし。す

こしのびさせ給ひてぞ、御馬たづね出でて、君ばかりたてまつりぬれど、ならはぬ山路に、御心ちもそこなはれて、誠に、危く見えさせ給へば、たかまの山といふわたりに、まばし、御心ちをためらふ所に、山城の國の民にて、深栖の五郎入道とかいふ者、まゐりかかりて、案内きこえたりしも、いとめざましうくちをし。上達部、思ひやる方なくて、ただ、目を見かはして、いかさまにせむと呆れたるに、あづまよりのほれる大將軍にて、みちのくの守貞直といふもの、大勢にて参れり。今はただ、どもかくも、のたまはすべきやうなければ、遂にかひなくて、かたきのために、御身をまかせぬるさまなり。やがて、宇治にみゆきあるべき由、奏すれば、御

心にもあらで、引かされおはします程に、心憂しといふものめなり。具行、藤房、忠顯少將など、やがて、おのが手の者どもに従へさせつ。大納言入道、御馬の志りに走りおくれ、てここかしこの岩かげ、木のもとにやすみつ、どかくためらふ程に、それも見つけられて、捕られぬ。君をば、宇治へ入れ奉りて、まづ、事によし、六波羅へきこゆる程に、一二日御逗留あり。

かくいふは、九月三十日なれば、空の景色さへ時雨がちに、涙もよほしがほなり。平等院の紅葉、御覽じやらるるも、かからぬ御幸ならばとあいなし。後冷泉院かどよ、ここに御幸し給ひて、三四日おはしましける、その世の人の心ち、上

下何事かはと、うらやましく、あはれにおぼさる。十月三日、都へいらせ給ふも、思ひしにかはりて、いとすさまじげなるものふども、衛府のすけの心ちして、御輿近くうちかこみたり。鳳輦は、あらぬ綱代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより、兩院、春宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御志つらひなごして、おはしませするも、いとほしうかたじけなし。まぢかき程に、よろづきこしめし、御覽じふる事毎につけても、いかでか、御心動かぬやうはあらむ。くちをしうおぼしみだる。ならはぬ御やどりに、時雨の音さへはしたなくて、まだなれぬ、いたやの軒の、むら時雨、

音をきくにも、ぬるる袖かな。

大鏡

左大臣時平

このおとどは、基經のおとどの御太郎なり。御母は、四品彈正尹人康親王のむすめなり。醍醐のみかどの御時、このおとど、左大臣の位にて、年いどわかたくておはしき。菅原のおとど、右大臣の位にて、おはします。そのをり、みかど、御歳いとわかとおはします。左右大臣に、世のまつりごとを、おこなふべき宣旨、くださしめ給へりしに、そのをり、左大臣、廿八九ばかり、右大臣、御歳五十七八にやおはしけむ。ともに、世のまつりごと、うちせしめ給ひしあひだ、右大臣、さへも世にすぐれ、めでたくおはし

まし、御心おきても、ことのほかに、かしこくおはしましき。左大臣は、御歳もわか、さへも、ことのほかに、おとり給へるより、右大臣、御おぼえ、ことのほかに、おはしましたるに、左大臣、やすからずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ。右大臣の御ために、よからぬこといできて、昌泰四年正月二十九日、太宰權帥になしたてまつりて、ながされ給ふ。

このおとどの子ども、あまたおはせしに、女君たちは、むことりし、男君たちは、みな、ほどほどにつけて、位どもおはせしを、それも、皆、かたがたにながされ給ひて、かなしきに、をさなくおはしける男君、女君たち、慕ひなきておはしけれ

ば、ちひさきは、あへなむと、おほやけも許さしめ給ひしかば、共に、ゐてくだり給ひしぞかし。みかどの御おきて、極めて、あやにくにおはしませば、この御子どもを、同じかたにだに、つかはさざりけり。かたがたに、いとかなしくおぼして、御まへの梅の枝を、御らんじて、

こちふかば、にほひおこせよ。うめの花、

あるじなしとて、春をわすれそ。

又、亭子のみかどに、聞えさせ給ふ。

流れゆく、われはみくづと、なりぬとも、

君志がらみと、なりてとどめよ。

なき事により、かく、つみせられ給ふを、からくおぼしなげ

きて、やがて、山崎にて、出家せしめ給ひてけり。都遠くなるままに、あはれに、心ほそくおぼされて、

君がすむ、宿のこずゑを、ゆくゆくも、

かくるるまでに、かへりみしはや。

また、播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ所に、御やどりせしめ給ひて、うまやの長の、いみじう思へるけしき、御覽じて、つくらせ給へる詩、いとかなし。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

かくて、筑紫におはしましつきて、あはれに、心ほそくおぼさるるゆふべ、をちかたに、所所、烟たつを御覽じて、夕されば、野にも山にも、たつけぶり、

なげきよりこそ、もえまさりけれ。

また、雲のうきて、ただよふを御覽じても

山わかれ、どびゆく雲の、かへりくる、

かげ見る時ぞ、なほたのまるる。

さりとも、世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならず、ただよふ水の、底までも、

きよきところは、月ぞてらさむ。

これ、いとかしこくあそばしたりかし。げに、月日こそは、てらし給はめとこそはあめれ。

まことに、おどろおどろしき事は、さるものにて、かくやらの歌や、詩などをさへ、いと、なだらかに、ゆゑゆゑしう、いひ

つづけ給ふと、見きく人人、あさましく、あはれにも、まもり居たり。物のゆゑ知りたる人なども、むげに、近く居よりて、ほかめせず、見きくけしきどもを見て、いよいよ、はへて物をくりいだすやうに、いひつづくるほどぞ、まことにけうなるや。繁樹、なみだをのごみつ、きようじ居たり。

筑紫におはします所の御門も、かためておはします。大貳のゐどころは、遙なれども、樓のうへの瓦などの、心にもあらず、御らんじやられけるに、又、いと近く、観音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして、つくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色。

観音寺只聽鐘聲。

これは文集、白居易、遺愛寺鐘欵耳聽。香爐峰雪撥簾看。といふ詩にもまささまに、つくらしめ給へりところそ、むかしの博士どもは申しけれ。

かの筑紫にて、九月九日、菊の花を御覽じけるついでに、まだ、京におはしまししとき、九月のこよひ、内裏にて、菊の宴ありしに、このおとど、つくらしめ給へりける詩を、みかど、かしこく感じ給ひて、御衣賜はせ給へりしを、筑紫に下らしめ給へりければ、御覽するに、いとど、そのをりおほしめし出でて、つくらせ給ひける。

去年今夜侍清涼。

秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。

捧持毎日拜餘香。

この詩、いとかしこく、人人、感じ申されき。

このことども、ただ、ちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて、作りあつめさせ給へりけるを、かきあつめ、一卷とせしめ給ひて、後集となづけられたり。又、をりをりの歌を、かきおかせ給へりけるを、おのづから、世にちりきこえしなり。世繼が、わかう侍りし時、この事の、せめてあはれに、悲しく侍りしかば、大學の衆の、なまふがうには、いますがりしを、とひたづね、かたらひとりて、さるべきゑぶくる、わりごやうのもの、てうじて、うちぐして、まかりつつ、習ひとりて侍りしかど、おいのけのはなはだしきことは、皆こそわすれ侍りけれ。これは、ただ、すこぶる、おほえ侍るなりといへば

きく人人、げにげに、いみじきすきものにもものし給ひけるかな。今の人は、さる心ありなむやと、感じあへり。また、雨のふる日、うちながめ給ひて、

あめのまた、かわける程の、なければや、

きてしぬれぎぬ、ひるよしもなき。

やがて、かしこにてうせ給へり。夜のうちに、この北野に、そのらの松をおほさしめ給ひて、渡りすみ給ふをこそは、只今の北野宮と申して、あら人神におはしますめれ。おほやけも、行幸せしめ給ふ。いとかしこく、あがめ奉り給ふめり。つくしのおはしまし所は、安樂寺といひて、おほやけより、別當所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。

内裏やけて、たびたびつくらしめ給ひしも、圓融院の御時の事なり。たくみども、うらいたどもを、いと、うるはしく、かなかきて、まかり出でつつ、又のあしたに、まゐりて見るに、きのふのうらいたに、物のすすけて見ゆるところのありければ、はしにのぼりて見るに、夜のうちに、虫のはめるなりけり。そのもじは、つくるとも、又もやけなむすがはらやむねのいたまのあはぬかぎりは、どこそありけれ。それも、この北野の、あらはし給へるとこそは、申すめりしか。かくて、このおとどは、筑紫におはして、延喜三年、みづのどのどり、二月廿五日に、うせ給ひしぞかし。御歳五十九。さて、後七年ばかりありて、左大臣時平のおとど、延喜九年己巳

四月四日うせ給ふ。御歳三十九。大臣の位にて十一年ぞおはしける。本院大臣と申す。この時平の大臣のむすめの女御もうせ給ひぬ。御孫の東宮も、一男八條大將保忠卿も、うせ給ひにきかし。この大將、八條にすみ給へば、うちに参り給ふほど、いと遙なるに、いかがおぼされけむ。冬は、もちひの、いと大きなるをば一つ、ちひさきをば二つ、焼きて、やきいしのやうに、御身にあててもち給へりけるが、ぬるくなれば、ちひさきをば一つづつ、大きなるをば、中よりわりて、御車ぞひに投げとらせ給ひける。あまうなる御よういなりかし。その世にも耳とどまりて、人の思ひければこそ、かくいひつたへ侍りけめ。この殿ぞかし、やまひづき給ひて、

さまさまの祈志給ひしに、薬師經のときやう、まくらがみにて、せさせ給ふに、いはゆる宮毘羅大將と、うちあげたるを、われをくびるとよむなりけりとおぼしける、おくびやうに、やがて、絶え入り給へり。經の文といひながら、こはき物のけに、どりこめられ給へる人には、げにあやしくはうちあげ侍りしかし。さるべきとはいひながら、ものは、をりふしごとく侍ることなり。

その弟の敦忠中納言も、うせ給ひにき。世にめでたき和歌の上手、管絃のみちにも、すぐれ給へりき。かくれ給ひて後、御あそびなどあるをりに、博雅三位の、さはる事ありて、まゐられぬ時は、けふの御あそびは、とどまりぬと、たびたび

召されてまゐるを見て、ふるき人人は、世のするこそあはれなれ、敦忠中納言の、いませがりしをりは、かかるみちに、この三位の、おほやけをはじめ奉りて、世の大事に、おもはるべきものにとこそは、思はざりしかとぞ、の給ひける。先坊に、みやす所まゐり給ふこと、本院のおどどの御むすめぐして、三四人なり。本院のは、うせ給ひにき。中將のみやすどころと聞えしは、後は、重明の式部卿の親王の、北の方にて、齋宮の女御の御ははにて、そも、失せ給ひにき。今一人の御息所は、いとやさしくおはせし、先坊を、戀ひかなしみ奉り給ふ。大輔なむ、夢に見奉ると聞きて、つくり給へる。ときのままも、慰めつらむ、君はさは、

夢にだに見ぬ、われぞかなしき、

御返事、大輔、

戀しさは、慰むべくも、あらざりき。

夢のうちにも、夢と見しかば、

今ひとりのみやす所は、トウカキ立上の宰相のむすめにや。その後朝の使に、敦忠中納言、少將にて去給ひける。宮うせ給ひて後、この中納言には、あひ給へるを、かぎりなく思ひながら、いかが見給ひけむ、文範の民部卿、播磨の守にて、殿のけいしにて、さぶらはるるを、われは、命みじかきぞうなり。かならず、死なんず。その後、君は、この文範に、ぞあひ給はんずると、の給ひけるを、あるまじきことと、いらへ給ひければ、あ

まがけりても見む世にたがへ給はじなどの給ひけるが
まことに、さていませざるぞかし。

ただ、この君たちの御中には、大納言源昇の卿の御女のは
らの、顯忠おとどのみぞ、右大臣までなり給へる。その位に
て、六年おはせしかど、すこしおぼす所やありけむ、出であ
りき給ふにも、家のうちにて、大臣の作法を、ふるまひ給
はず。御ありきの折は、おぼろげにて、御さきまゐらず、まれ
まれも、ほのかにぞまゐりし。ごせん、つがひ給はず、はつか
に、かずすくなにてぞ侍ひし。御車ぞひ四人、つがはせ給は
ざりき。又、半挿だらひにて、御手すまさせ、寢殿のひんがし
の間に、棚をして、小桶に、ちひさきひさげぐして、置かれた

れば、仕下、つとめてごどに、湯もてまゐりて入れければ、人
しても、かけさせ給はず、われ、出でさせ給ひて、御手づから
ぞすましける。御めし物は、うるはしく、御器などにもまゐ
りすゑで、ただ、御かはらけにて、臺などもなく、をしきに、ど
りすゑつつぞ、まゐらせける。けんやく志給ひしも、さるべ
きことのをりの御座と、御はんどころとにぞ、大臣とは見
え給ひし。かくもてなし給ひしけにや、このおとどのみぞ、
御ぞうの中に、六十餘までおはせし。四分一の一へにて、大
饗し給へる人なり。富小路大臣と申す。

これより外の君たち、みな、三十餘、四十にすぎ給はず。その
故は、ただごどにはあらず、この北野の、御なげきになむあ

るべき。顯忠の大臣の御子、重輔の宰相右衛門佐とておはせしが御子なり、今の三井寺の別當心譽僧都、山階寺權別當快公僧都など、このきんだちこそは、ものし給ふめれ。敦忠の中納言、御をのこ子、あまたおはしける中に、兵衛佐なにかしの君とかや申しし。そのきみ出家して、往生し給ひにき。その僧の御子なり、岩倉の文慶僧都は、敦忠公の御むすめは、枇杷の大納言の北のかたにて、おはしき。かく、あさましき悪事を、申しおこなひ給へりしつみにより、このおどどの御すゑは、おはせぬなり。さるは、大和魂などは、いみじくおはしたるものを。

延喜の、世間の作法、またためさせ給ひしかど、過差をば、えまづめさせ給はざりしに、この殿制をやぶりたる御さうぞくの、ことの外に、めでたきをして、うちに、まゐり給ひて、殿上にさぶらひ給ふを、みかど、小部より御らんじて、御けしき、いとあしくならせ給ひて、職事をめして、せけんの過差の制、きびしきころ、左のおどどの、一の人といひながら、美麗ことの外にて、まゐれる、便なきことなり。すみやかに、まかりいづべきよし、おほせよと、おほせられければ、うけ給はる職事は、いかなる事にかと、おそれおほえけれど、まゐりて、わななくわななく、まかおかの事と申しければ、いみじくおどろきて、かしまりうけ給はりて、御隨身の、みさきまゐるも、制し給ひて、いそぎまかりいで給へば、御前

どももあやしと思ひてなむ。さて、本院のみかど、一月程さ
させて、みすのどにも、いで給はず、人などのまゐるにも、か
んだうの、おもければとてあはせ給はざりけり。ざりしに
こそ、世のなかの過差は、たひらぎたりしか。うちうちにく
け給はりしかば、さてばかりぞ、まづまらむとて、みかどと、
御心あはせさせ給へりけるとぞ。

この左大臣、ものをかしさぞ、えねんせさせたまはざり
ける。わらひたせ給ひぬれば、すこぶる、事もみだれける
が、北野と世をまつりごたせ給ふあひだ、ひだうなること、
おほせられければ、さすがに、やむごとなくて、せちにし給
ふことをば、いかがはとおぼして、このおとゞの志給ふこ

となれば、ふびんなりと、なげき給ひけるを、なにかしの史
が、ことにも侍らず、おのれが、かまへて、かの御事を、とどめ
侍らむと申しければ、いとあるまじきこと、いかにしてか
はなどの、給はさせけるを、ただ、御覽せよとて、座につきて、
こときびしく、さだめののしり給ふに、この史、ふんばさみ
に、文はさみて、いらなくふるまひて、このおとゞに奉ると
て、いと、たかやかに、ならして侍りけるに、おとゞ、ふみもえ
とらずして、わななきて、やがてわらひいで、今日は、ずちな
し、右のおとゞに、まかせ申すとだに、いひやり給はざりけ
れば、それにてこそ、菅原のおとゞの、心のままに、まつりご
ち給ひけれ。

また、北野の神にならせ給ひて、いとおそろしく、神のなり
ひらめき、清涼殿におちかかりぬと見えけるに、本院のお
とど、太刀をぬきかけて、生きても、わが次にこそ、ものし給
ひしかけふ、神となり給ふとも、この世には、われに、どころ
おき給ふべし。いかでか、さらではあるべきと、にらみやり
て、の給ひける。一度は、まづまらせ給へりけりとぞ、世の人
申し侍りし。されど、それは、かのおとどの、いみじくおはす
るには、あらず、王威の、かぎりなく、おはしますによりて、理
非を、まめさせ給へるなり。

小一條院

左大臣師尹の傳記中の一條。

この殿の、御おもておこし給ふは、皇后宮におはしましき。

この宮の、御腹の一のみこ、敦明親王とて、式部卿の宮とぞ
申ししほどに、長和五年正月廿九日、三條院、おりさせ給へ
ば、たうだい、位につかせたまひて、この式部卿の宮、東宮に、
たたせたまひにき。御年廿三。ただし、だうりあることと、皆
人、おもひ申ししほどに、院、うせさせ給ひて、後、二年ばかり
ありて、いかがおほしめしけむ、宮たちと、申ししをり、よろ
づに、あそびならはせ給ひて、うるはしき御ありさま、いと
くるしく、いかで、かからでもあらばやと、おほしなられて、
皇后宮に、かくなむおほえはべると、申させ給ふを、いかで
かは、げに、さもやはおほさんずる。すべて、あさましく、ある
まじき事との、み、いさめ申させ給ふに、おほしあまりて、入

道殿に御せうそこありければ、まゐらせ給へるに、御物がたり、こまやかにて、この位去りて、ただ、ころやすくて、あらむとなむ、思ひ侍るとき、こえさせければ、さらにさらに、うけたまはらじ。さは、三條院の御すゑは、たえねど、おぼしめしおきてさせ給ふか。いと、あさましく、かなしき御事なり。かかる御心の、つかせ給ふ御事は、こと事ならじ。故冷泉院の御もののけなどの、おもはせたてまつるなり。さおぼしめすべきぞと、せいし給ふに、さらば、ただ、ほいもあり、出家にこそは、あんなれど、の給はするに、さまで、おぼしめすことならば、いかが、ども、かくも申さむ。うちに、奏し侍りてをど、申させ給ふをりにぞ、御けしき、いとよく、ならせ給ひ

にける。

さて、殿、うちにまゐらせ給ひて、大宮にも、うちにも、申させ給ひければ、いかがは、きかせ給ひけむな。このたびの東宮には、式部卿の宮をどこそは、おぼしめすべけれど、故一條院の、はかばかしき、御うしろみなければ、東宮に、たうだいを、立てたてまつるなりと、仰せられしかば、これも、おなじ事なりと、おぼしきためて、寛仁元年丁巳八月五日にこそは、九さいにて、三の宮、東宮に立たせ給ひて、同月の廿三日にこそは、壺切といふ太刀は、うちより、もてまゐりしか。たうだい、位につかせ給ひしかば、すなはち、東宮にも、まゐるべかりしを、まかるべきにやありけむ、とかくさはりて、こ

の年比、うちのをさめ殿に、さぶらひつるぞかし。同じき三年己未八月廿八日、御年十一にてこそは、御元服せさせ給ひしか。さきの東宮をば、小一條院と申す。いまの東宮の御ありさま、申すかぎりなし。つひのこととはおもひながら、ただ今、かくとは、思ひかけざりしことなりかし。小一條院、わが御心と、かくのがれ給へることは、これをはじめとす。世はじまりてのち、東宮の位、とりさげられ給ふことは、八九代ばかりにやなりぬらむ。なかに、法師東宮、おはしけるこそ、うせ給ひて後に、贈太政天皇と申して、六十餘國に、いはひすゑられ給へれ。おほやけも、まろしめして、崇道天皇とて、官物のほつほ、さきたてまつらせ給ふめり。

この院の、かくおぼしたちぬること、かつは、殿下の御報の、はやくおはしますに、おされ給へるか。又、おほくは、元方民部卿の靈の、つかうまつりつるなりといへば、このさぶらひ、それも、さるべきなり。このほどの御事こそ、この外に、かはりて侍れ。なにかしは、いとくはしく、うけたまはりたることども、侍るものをといへば、世繼、さも侍らむ。つたはりぬることはいで、うけ給はらばや。ならひにし事なれば、ものの聞かまほしく侍るぞといふ。きようありげに思ひたれば、事のやうだいは、三條院の、おはしましけるかぎりこそあれ、うせさせ給ひにける後は、世の常の、東宮の御やうにもなく、殿上人など、まゐりて、御

遊せさせ給ひもてなしかしづき申す人などもなく、いと
つれづれにまぎるるかたなく、おぼしめされけるままに、
心やすかりし、御ありさまのみこひしく、ほけほけしきま
で、おぼえさせ給ひけれど、三條院、おはしましつるかぎり
は、院の殿上人なども、まゐりや、御つかひも、まげく、まゐり
かよひなどするに、人目も、まげく、よるづ、なぐさめさせ給
ふを、院、うせおはしましては、世の中の、ものおそろしく、お
ほぢのゆきかひも、いかがとのみ、わづらはしく、ふるまひ
にくきにより、宮司などだにも、まゐりつかうまつること
も、かたくなりゆけば、まして、げすの心は、いかがはあらむ。
主殿司の志も、べも、朝きよめ、つかうまつることもなけれ

ば、庭の草も、まげりまさりつつ、いと、かたじけなき、御すみ
かにておはします。

まれまれ、まゐりよる人人は、世にきこゆることとて、三の
宮、かくておはしますを、心ぐるしく、殿も、大宮も、思ひ中、こ
せ給ふに、若し、うちに、をどこ宮も、いでおはしましなば、い
かがあらむ。さあらぬさきに、東宮に、たてまつらばやとな
む、仰せらるなる。されば、おしてとられさせ給ふべかなり
などのみ申すを、まことにしも、あらざらめど、げに、ことの
さまも、よもど、おぼゆまじければにや、聞かせ給ふ御心ち
は、いとど、うきたるやうに、おぼしめされて、ひたぶるに、と
られむよりは、われとや、のきなましと、おぼしめすに、又、た

か松どののみくしげどの、まゐらせ給ひて、殿のはなやかにもてなしたてまつらせ給ふべかなりとて、れいの事なれば、世の人、さまざま、さだめ申すを、皇后宮、きかせ給ひて、いみじう、よろこばせ給ふを、東宮は、いとよかるべきことなれど、さだにあらば、いとど、わがおもふことえせじ、なほ、かくて、えあるまじく、おぼしめされて、御母宮に、志かゝかなむおもふと、聞えさせ給へば、さらなりや、いといと、あるまじき御事なり。みくしげどのの御ことをこそ、まことならば、すすみきこえさせ給はめ、さらにさらに、おぼしめしよるまじき事なりと、聞えさせ給ひて、御もののけのするなりと、御いのりども、せさせ給へど、さらに、おぼしめしと

どまらぬ御心のうちを、いかでか、世人も聞きけむ、さてなむ、御匣殿、まゐらせ給へども、きこえさせ給ふべかなりなどいふこと、殿の方にも、きこゆれば、まことに、さも思しゆるぎて、の給はせば、いかが、すべからむなどおぼす。さて、東宮は、つひに、思し召したちぬ。さて後に、みくしげ殿の御事もいはむに、なかなか、それは、などかなからむなど、よき方ざまに、おぼしなしけむ、不覺のことなりやな。壺切などのこと、ひがごどにあめり。故三條院、たびたび、申させ給ひしかども、とかく、申しやりて、たてまつらせざりしとこそ、聞き侍りしか。されば、故院も、さはれなくとも立てではとて、おはしまししなり。

皇后宮にも、かくとも、申させ給はず。ただ、御心のままに、殿に、御せうそこ、聞えむとおぼしめすに、むつまじう、さるべき人も、ものし給はねば、中宮の權大夫殿の、おはします四條の坊門と、西の洞院とは、まぢかきぞかし。そればかりを、こと人よりはとや、おぼしめしよりけむ、藏人なにがしを、御つかひにて、あからさまに、まゐらせ給へとあるを、おぼしもかけぬことなれば、おどろかせ給ひて、なにしに召すぞと、問はせ給へば、申させ給ふべき事の、さぶらふにこそと申すを、このきこゆる事どもにやとおぼせど、のかせ給ふことには、さりとも、よにあらじ、みくしげ殿の、御事ならむとおぼす。いかに、わが御こころ一つには、思ふべきこ

とならねば、おどろきながら、まゐり候ふべきを、おどとに、あない申してなむ、さぶらふべきと、申させ給ひて、まづ、殿にまゐり給へり。東宮より、志かおかなむ、仰せられたりつると、申させ給へば、殿も、おどろかせ給ひて、なに事ならむと仰せられながら、大夫殿と、おなじやうにぞ、おぼしよられける。まことに、みくしげ殿の御事の、給はせむを、いなび申さむも、びんなし。まゐり給ひなば、又、さやうに、あやしくては、あらせたてまつるべきならず。又、さては、世の人の申すなるやうに、春宮の、かせ給はむの御おもひあるべきならずかしとおぼせど、志か、わざと召さむには、いかでか、まゐらではあらむ。いかに、の給はせむことを、聞くべき

なりと申させ給へば、まゐらせ給ふほど、目もくれぬ。
陣に、左大臣殿の御車や、御前どものあるを、なまむつかし
とおぼせど、歸らせ給ふべきならねば、殿上にのほらせ給
ひて、まゐりたるよし、啓せさせよと、藏人にのたまはすれ
ば、おほい殿の御まへに、さぶらはせ給へば、ただ今は、えな
む申し候はぬと、きこえさするほど、見まはさせ給ふに、庭
の草も、いとふかく、殿上のありさまも、東宮のおはします
とは見えぬ、あさましう、かたじけなげなり。おほい殿、いで
給ひて、かくと啓すれば、あさがれひのかたに、いでさせ給
ひて、召しあれば、まゐり給へり。いとちかく、こちと仰せら
れて、ものせらるること、もなきに、あないするも、はばかり

多かれど、おとどに、きこゆべきことのあるを、傳へものす
べき人なきに、間近きほどなれば、たよりにもと、思ひて、せ
うそこし聞えつるなり。そのむねは、かくて侍るこそは、本
意ある事と思ひ、故院の志おかせ給へることを、たがひた
てまつらむも、かたがたに、憚りおもはぬにあらねど、かく
てあるなむ、思ひつづくるに、罪ふかくおぼゆる。うちの御
行末は、いとほるかに、ものせさせ給ふ。いつともなくて、は
かなき世に、命も去りがたし。このありさまのきて、心にま
かせて、おこなひをもし物まうでもし、やすらかにてなむ、
あらまほしきを、むげに、さきの東宮にてあらむは、見ぐる
しかるべくなむ。院號賜はりて、としに受領などありてな

む、あらまほしきを、いかなるべきかと、つたへ聞えられよ
と、仰せられければ、かしこまりて、まかでさせ給ひぬ。
その夜は、更けにければ、つとめてぞ、殿にまゐらせ給へる
に、うちへまゐらせ給はむとて、御さうぞくのほどなれば、
え申させ給はず。大かたには、御どもに、まゐるべき人人、さ
らぬも、出でさせ給はむに、見參せむと、多くまゐりつとひ
て、物さわがしければ、御車に奉りに、おはしまさむに、申さ
むとて、その程、寢殿の隅の間の、かう欄に、よりかかりて、お
させ給へるを、源民部卿よりおはして、など、かくておはし
ますと、きこえさせ給へば、この殿には、かくしきこえさせ
給ふべきことにもあらねば、まかおか、ことのあるを、人人

さぶらふめれば、え申さぬなりと、の給はするに、うち變り
て、この殿も、おどろき給ふ。いみじう、かしこきことにこそ
あなれ。ただ、とく、きかたてまつらせ給へ。うちに、まゐら
せ給ひなば、いとど、人がちにて、え申させ給はじとあれば、
げにと、おほして、おはしますかたに、參り給ひつれば、さな
らむと、御心えさせ給ひて、隅の間に、出でさせ給ひて、東宮
に、まゐりたりつるかど、問はせ給へば、よべの御せうそく、
くはしく申させ給ふに、さらなりや、おろかに、おほしめさ
むやは、おして、おろしたてまつらむことは、はばかりおほ
しめしつるに、かかること、いできぬる御よろこび、なほ
つきせず、まづ、いみじかりける大宮の、御すくせかなど、お

ほしめす。

民部卿殿に、申しあはせさせ給へば、ただ、とくとく、せさせ給ふべきなり。なにか、よき日とはせ給ふ。すこしも延びば、おほし返して、さらでありなむとあらむをば、いかがはせさせ給はむと、申させ給へば、さる事とおほして、御こよみ御らんずるに、けふも、あしき日にもあらざりけり。やがて、關白殿も、まゐらせ給へるほどに、とくとくと、そそのかし申させ給ふ。まづ、いかに、大宮に申してこそはとて、うち、おはしますほどなれば、まゐらせ給ひて、かくなむと、聞かたてまつらせたまへば、まして、女の御心は、いかがは、思し召されけむ。それよりぞ、春宮にまゐらせ給ふ。かう

申すことは、寛仁元年八月六日の事なり。

御子どもの殿ばら、また、れいも、御どもにまゐり給ふ上達部、殿上人、ひきぐせさせ給へれば、いとちたく、ひびきことにて、おはしますを、まちつけさせ給へる宮の御心ちは、さりども、すこし、すずろはしう、おほしめされけむかし。心も、まらぬ人は、つゆまゐりよる人だになきに、昨日、二位中納言殿の、まゐり給へりしだに、あやしとおもふに、又、今日、かくおびただしく、加茂まうでなどのやうに、御さきのおとも、おどろおどろしうひびきて、まゐらせ給へるを、いかなる事ぞと、あきるに、すこしよろしき程のものは、みくしげ殿の御事、申させ給ふなめりとおもふは、さも似つか

はしや。むげに思ひやりなききはのものは、又我心にかか
るままに、内のいかにおはしますぞなどまで、こころ騒ぎ
しあへりけるこそ、あさましう、ゆゆしけれ。

母の宮だにも、おぼせ給はざりけり。かく、この御方に、もの
さわがしきを、いかなる事ぞと、あやしくおぼして、あない
し申させ給へど、れいの、女房のまゐるみちを固めさせ給
ひてけり。殿には、年ごろ、おぼしめしつる事など、こまかに
きこえむと、心強く、おぼしめしつれど、まことになりぬる
をりは、いかになりぬる事ぞと、さすがに、御心、さわがせ給
ひぬ。むかひ聞えさせ給ひては、かたがたに、おくせられ給
ひけるにや、ただ、昨日のおなじさまに、なかなか、言づくな

に仰せらるる。御かへりは、さりとも、いかにかくはおぼし
めしよりぬるぞなどやうに、申させ給ひけむかしな。

御けしきの、心ぐるしさを、かつは、見たてまつらせ給ひて、
すこし、おしのごはせ給ひて、さらば、けふ、よき日なりとて、
院になしたてまつらせ給ひて、やがて、事ども、はじめさせ
給ひて、よろづの事、さだめおこなはせ給ふ。判官代には、宮
づかさども、藏人などかはるべきにあらず。別當には、中宮
の權大夫を、なしたてまつり給へれば、おりて、拜し申させ
給ふ。事ども、さだまりはてぬれば、いでさせ給ひぬ。

いと、あはれに侍りけることは、殿の、まだ、さぶらはせ給ひ
ける時、母宮の御かたより、何方の道より、たづねまゐりた

るにか、あらはに、御覽するも、まらぬけしきにて、いと、あやしげなる姿したる女房の、わななく、わななく、いかに、かはせさせ給ひつるぞと、聲もかはりて、申しつるなむ、あはれにも、又、をかしうも、とこそ仰せられけれ、勅使こそ、誰とも、たしかにも、聞き侍らね、ろくなど、にはかにて、いかにせられけむといへば、殿こそは、せさせ給ひけめ、さばかりの事にて、逗留せさせ給はむやは。

ひたきや、陣屋など、やられけるほどにこそ、えたへず、志のびねなく、人人侍りけれ、まして、皇后の宮、堀川の女御殿などは、さばかり心ふかく、おはします御心どもに、いかばかり、おぼしめしけむと、おぼえ侍りき。

世の中の人、堀川の女御殿の、

雲井まで、たちのぼるべき、けぶりかど、

見えし思ひの、ほかにもあるかな。

といふ歌を、よみ給へりなど申すこそ、さらに、よもとおぼゆれ。いとさばかりの事に、和歌の道、おぼしよらじかしな。御こころの中には、おのづから、後にも、おぼえさせ給ふやうもありけめど、人の聞き傳ふるばかりは、いかがありけむといへば、おきなげに、それは、さる事に侍れど、むかしも今も、いみじきことのをり、かかる事、いと多くぞきこえ侍りしとて、さざめく。
さて、いかなる事にか、東宮、御位せめおろし取りたてまつ

り給ひては、又、御簾に、とりたてまつらせ給ふ程、もてかし
づき奉らせ給ふ御ありさま、ことに、御心もなぐさませ給
ふばかりこそ、きこえ侍りしか。おもの、まゐらするをりは、
臺盤所におはしまして、御臺盤などまで、手づから、のごは
せ給ふ。何を、めし試みつつなむ、まゐらせ給ひける、御さ
うじ口まで、もておはましして、女房にたまはせ、殿上に、い
だす程にも、たちそひて、よかるべきさまに、をしへなど、こ
れこそは、御ほいよと、あはれにぞ。

太政大臣道長

太政大臣道長のおとどは、太皇太后宮彰子上東門院皇太后宮
子威中宮子尚侍子春宮の御息所の御父、當代ならびに、春宮

の祖父におはします。ここの御中に、后三人ならびすゑ
て、見たてまつらせ給ふ事は、入道殿より外に、きこえさせ
給はざめり。關白左大臣、内大臣、大納言二人、中納言の御お
やにて、おはします。さりや、きこしめしあつめよ、日本國に
は、唯一無二におはします。

まづは、つくらしめ給へる、御堂などのありさま、鎌足のお
とどの多武峰、不比等大臣の山階寺、基經のおとどの極樂
寺、忠平おとどの法性寺、九條殿の楞嚴院、あめのみかどの
つくり給へる東大寺も、佛ばかりこそは、おほきにおはし
ます。めれど、なほ、この無量壽院には、ならび給はず。まして、
よの寺は、いふべきにあらず。大安寺は、都卒天の一院を、

天竺の祇園精舎にうつしつくり、天竺の祇園精舎をもろこしの西明寺にうつしてつくり、もろこし、西明寺の一院を、このみかどは、大安寺に、うつさしめ給へるなり。まかあれども、ただいまは、この無量壽院、まさり給へり。南京の、そこばくおほかる寺ども、なほ、あたり給ふなし。恒徳公の法住寺、いとまうなれど、なほ、この無量壽院、すぐれ給へり。難波の天王寺など、聖徳太子、御こころに入れて、つくりたまへれど、なほ、この無量壽院、まさり給へり。奈良は、七代寺、十五大寺などを見くらぶるに、なほ、この無量壽院、いとめでたく、極樂淨土の、この世に、あらはれにけるかど見えたり。かるがゆゑに、この無量壽院を思ふに、おほしめし願ずる

事も侍りけむ。

淨妙寺は、東三條殿、大臣になり給ひてのよるこびに、木幡にまゐらせ給へりしに、御供に、入道殿、ぐしたてまつらせ給ひて御らんずるに、多くの、先祖の御骨、おはするに、鐘のこゑ聞き給はぬ、いと、うき事なり、わが身、おもふさまになりたらば、三昧堂たてむと、御心のうち、おほしくはだてたりけるとこそは、うけ給はれ。

むかしも、かかる事おほく侍りける中に、極樂寺、法性寺ぞ、いみじくはべるや。御年なども、おとなびさせたまへるだにも、おほしめしよるらむほど、なべてならずおほえ侍るに、いづれの御時とは、たしかに、え聞き侍らず、ただ、深草の

御ほどにやなどぞ、おもひやられ侍る。芹川のみゆきせしめ給ひけるに、昭宣公、わらは殿上に、つかうまつらせ給へりける。みかど、琴を、あそばしけるに、この琴ひく人は、べつにつめを作りて、およびにさし入れて、ぞ、ひくことにて侍りし。さて、もたせ給ひたりけるを、おとしおはしまして、大事に、おほしめしけれど、又、つくらせ給ふべきやうもなかりければ、さるべきにぞおほしめしけむ、おとなしき人人にもおほせられで、をさなくおはします君にしも、もどめてまゐれど、おほせられければ、御馬をうちかへして、おはしましけれど、いづこをはかりとも、いかでかはたづねさせ給はむ、見いでてまゐらせざらむこと、の、いみじう、思し

めされければ、これ、もどめいでたらむ所には、一伽藍をたてむと、願じおほして、求めさせ給ひけるに、いできにたる所ぞかし、極樂寺は、をさなき御心に、いかでか、おほしめしよらせ給ひけむ。さるべきにて、御つめもおち、をさなくおはします人にも、おほせられけるに、こそは侍りけむ。
さて、やむごとなく、ならせ給ひて、御堂、たてさせにおはします御車に、貞信公は、いとちひさくて、ぐしたて、まつり給へりけるに、法性寺のまへ、渡り給ふとて、てごに、此所こそ、よき堂どころなめれ。ここに、たてさせ給へかしと、きこえさせ給ひけるに、いかに見て、かくいふらむとおほして、さしいで、御らんずれば、まことに、いとよく見えければ、

繁樹も
まゐり
て侍り
きこは
すべは
世繼の
話なれ
ば、繁
樹云
も世繼
の話を
りこ即
にち居
るこ

をさなき目に、いかで、かく見つらむ、さるべきにこそあら
めど、おぼしめして、げにいとよき所なめり。ましが堂をた
てよ。我は、まかゝかの、事のありしかば、そこに、たてんずる
ぞと、申させ給ひける。さて、法性寺は、たてさせ給ひしなり。
また、九條殿の、飯室の事などは、いかにぞ。横川の大僧正の、
御房に上らせ給ひし御どもには、繁樹もまゐりて侍りき。
かうやうのことども、きこえ給ふれど、なほ、この入道殿、世
にすぐれぬけいでさせ給へり。天地に、うけられさせ給ふ
は、この殿こそおはしませ。何事も行はせ給ふをりに、いみ
じき、大風ふき、なが雨ふれども、まづ、二三日かねて、そらは
れ、つちかわくめり。かかれれば、或は、聖徳太子のうまれ給へ

繁樹に
も御供
りたり
へると
り。或
この説
の繁に
樹の二
字は世
繼の誤
りかど
り。ま
どのま
もきこ
ゆれど
さなき
ば念明
ならむ

ると申し、あるひは、弘法大師の、佛法興隆のため、うまれ
給ふとも申すめり。げに、それは、おきながら、さがな目にも、
ただ人とは、見えざんめり。なほ、權者にこそ、おはしますめ
れとなむ、仰ぎみたてまつる。かかれれば、この世の、たのしき
こと、かぎりなし。その故は、むかしは、殿ばらや、宮ばらの、う
まかひ、うしかひ、なにの御靈會、祭のれうとて、せに、かみ、こ
めなど、こひののしりて、野山の草木をだにやは、からせし。
仕丁、おもものもち出できて、人のもの、とりうばふこと、たえ
にけり。また、さとのとね、むらの行事、いできて、火祭や、なに
やど、わづらはしくせめしこと、いまは、きこえず。かばかり、
安穩泰平なる時に、あひなむやど、おもへば、おきながら、い

やしきやどりも、帯ひもを解きて、門をだにささで、やすら
 かに、のびふしたれば、としもわか、いのちものびたるぞ
 かし。まづは、北野、加茂河原につくりたる、まめ、ささげ、うり、
 なすびといふもの、このなかごるは、さらに、すべなかりし
 ものをや。この年ごるは、いどこそたのしけれ。人のとらぬ
 をば、さる物にて、馬牛だにぞはまぬ。されば、ただ、まかせす
 てつつ、おきたるぞかし。かく、たのしき、彌勒の世にこそ、あ
 ひて侍れやと、いふめれば、いまひとりのおきな、ただ今は、
 この御堂の夫を、まきりに召す事こそ、人は、たへがたげに
 申すめれ。それは、さは、聞き給はぬかと、いふめれば、世繼、志
 かたか、その事である。二三日まぜに、召すぞかし。されど、そ

今一人
 の翁と
 あるこ
 樹が繁
 れなり

れ奉るに、あしからず。故は、極樂淨土の、あらたに、あらはれ
 いで給ふべきために、召すなりと、おもひ侍れば、いかで、力
 たへば、まゐりて、つかうまつらざらむ。行末に、この御堂の
 草木となり、しがなとこそ、おもひはべれ、されば、ものの
 心志りたらむ人は、のぞみても、まゐるべきなり。されば、お
 きなら、またあらじか、一度かかず、たてまつりはべるなり。
 さて、まゐりたれば、あしきことやはある。いひ、さけ、まげく
 たび、もてまゐるくだものをさへ、めぐみたび、つねに、つか
 うまつるものは、衣裳をさへこそは、あておこなはしめ給
 へ。されば、まゐる下人も、いみじう、いそがしがりて、進み、つ
 どふめるといへば、まか、それ、さる事に侍り、ただし、おきな

らが思ひえて侍るやうは、いとたのもしきなり。おきな、いまだ世に侍るに、衣裳やれ、むづかしきめ見侍らず。又、飯、酒に、ともしきめ見侍らず。もし、この事ども、すぢなからむ時は、かみ三枚をぞもとむべき。故は、入道殿下の御まへに、申文を、たてまつるべきなり。そのふみに、つくるべきやうは、翁、故太政大臣貞信公殿下の御時の、小舎人わらはなり。それ、おほくの年つもりて、すぢなくなりにて侍り。閣下のきみ、すゑの家のこにおはしませば、おなじ君と、たのみあふぎ奉る。ものすこし、めぐみ給はらむと、申さむには、せうせうのものは、たばじやはとおもへば、それ、案のものにて、くらに、おきたるがごとくなむ、思ひ侍るといへば、世繼、それ

は、げに、さる事なり。家まづしくならむをりは、みてらに、申文を奉らしめむとなむ、いやしきわらはべと、うちかたらひをると、おなじところに、いひかはす。

さてもさても、うれしく、對めんしたるかな。年比の、ふくろのくちあけ、ほころびを、たち侍りぬるごと。さても、この、のしる無量壽院には、いくたびまゐりて、をがみ奉り給ひつといへば、おのれは、大御堂くやうのどしの、ゑの日は、人いみじう、はらふべかなりと、ききしかば、試樂といふ事、三日かねて、せしめ給ひしになむ、まゐりて侍りしといへば、世繼、おのれは、たびたび、参り侍りぬ。くやうの日の、ありさまの、めでたさは、さらにもあらずや。またの日、けふは、御佛

など、ちかくて、をがみたてまつらむ。ものどもとりおかれぬさきにと思ひて、まゐりて侍りしに、宮たちの諸堂をがみたてまつらせ給ひし、見申し侍りしこそ、かかる事にあはむとて、いままで、いきたるなりけりと、覺え侍りしか。物おぼえてのち、さる事をこそ、まだ見侍らね。御てぐるまに、よどころ、たてまつりしぞかし。くちに、大宮、皇太后宮、御そでばかりを、いささか、さしいでさせ給ひて侍りしに、枇杷どのの宮の、御ぐしの、地にいと長くひかれさせ給ひて、いでさせ給へりしは、いとめづらかなりしことかな。まりの方に、中宮、かんの殿、たてまつりて、ただ、御身ばかり、車におはしますやうにて、御子ども、みながらいでて、それも、地

までこそひかれ侍りしか。一品宮も、中に奉りたりけるにや。御子どもは、なにかしのぬしの、もちたうびて、御車のまりにぞ、さぶらはれし。ひとへの御ぞばかりを、たてまつりて、おはしますなめり。御車は、まうち君たち、ひかれて、まりに、關白殿をはじめ奉り、殿ばら、さらぬ上達部、殿上人、御直衣にて、あゆみつづかせ給へりし。いで、あないみじや。中宮權大夫殿のみぞ、堅固の物忌にて、まゐらせ給はざりし。さていみじく、くちをしがらせ給ひける。

中宮の御装束は、權大夫殿、せさせ給へりし。いときよらにこそ、見え侍りしか。くやうの日、けいすべき事ありて、おはします所にまゐりて、五所、おならばせ給へりしを、見たて

まつりしかば、中宮の御ぞの、優に見えしは、わがまたれば
にやとこそ、大夫殿おほせられけれ。かく、くちばかり、さか
しらだち侍れど、げらうのつたなき事は、いづれの御ども、
ほどへぬれば、いれども、つぶとわすれ侍りにけるよ。こ
とにめでたく、せさせ給へりければ、にや、または、くれなる、
うす物の御ひとへかさねにや、御うはぎ、よくもおほえ候
はず。はぎのおり物の三重がさねの御からぎぬに、あきの
野をぬひものにし、ゑにもかかれたるにやとぞ、めもおど
ろきてみ給へし。ことみやみやの殿ばらの、てうじて奉
らせ給へりけるとぞ、人申しし。大宮は、二重おりもの、お
かさねられて侍りし。皇太后宮は、そうじて唐装束。かんの

殿のは、殿よりこそはせさせ給へりしか。こと御かたがた
のも、ゑがきなどせられたりと、きかせ給ひて、俄に、箔おし
などせられたりければ、入道殿御らんじて、よき呪師の装
束かなど、わらひ申させ給ひけり。

殿は、まづ、御堂御堂あけつつ、待ち申させ給ふ。南大門のほ
どにて、見申すだに、ゑましくおほえ侍りしに、御堂、渡殿の
はざまより、一品宮の辨の乳母、今一人は、それも、一品の宮
の大輔の乳母、中將乳母とかや、三人とぞうけたまはりし、
御車よりありさせ給ひて、ゑさりつづかせ給ひつるを見
たてまつり給へるぞかし。おそろしさに、わななかれしか
ど、けふ、さばかりの事は、ありなむやと、おもひて見まゐら

するに、などてかはとは申しながら、いづれ聞えさすべくもなく、どりどりに、めでたくおはしまさふ。大宮の御ぐし、御ぞのすそに、あまらせ給へりし。中宮は、御たけに、少しあまらせ給ふにや。御あふぎを、いとちかく、さしかくしておはします。皇太后宮は、御ぞのすそに、一尺ばかりあまらせ給へる。御すそあふぎのやうにぞ。かんの殿、御たけに、七八寸あまらせ給へり。皇太后宮は、御あふぎ、少しのけて、さしかくさせ給へりけり。一品宮は、殿の御前、なにかるさせ給ふ、たたせ給へとて、なげし、おりのぼらせ給ふ御手を、とらせつつ、たすけ申させ給ふ。あまりあまりなる事は、おどろく心ちなむ志給へける。あらはならず、ひきふたぎなど、つ

くろはせ給ひける程に、御らんじつつけられたる物か。あな
いみじ。みやづかへにすぐせのつくる日なりけりど、いけ
るここちもせで、三人ながら、さぶらひ給ひける程に、宮た
ち、見たてまつりつるか、いかがおはしましつる、このおい
法師のむすめたちには、けしうはあらずぞおはしまさう
な。なあなづられそよど、うちゑみて、おほせられかけて、い
たうも、ふたがせ給はで、おはしましたりしなむ、いきいで
たる心ちして、うれしなどは、言ふべきやうもなく、かたみ
にみれば、かほは、そこらけさうじたりつれども、草の葉の
色のやうにて、又、あかくなりなど、さまさまに、あせみづに
なりて見かはしたり。さらぬ人だに、あされたる物のぞき

は、いと便なきことにするを、せめて、めでたうおぼしめされければ、御よろこびにたへで、さばれとおぼしめしつるにこそと、おもひなすも、心おごりなむするど、のたまひいまさうじける。

かうやうの事どもを、見給ふままに、いとしも、この世の榮花の御さかえのみおぼえて、染着の心のいとど、ますますにおこりつつ、道心つくべうも侍らぬに、河内國、そこそこにするむ、なにがしひじりは、いほりより出づる事もせられねど、後世のせめをおもへばとて、のほりまゐらせたりけるに、關白殿のまゐらせ給ひて、雜人どもをはらひのしるに、これこそは、一の人におはしますめれと見奉るに、入

道殿の御前にゐさせ給へば、なほ、まさらせ給ふなりけりと、見奉る程に、また、行幸なりて、亂聲し、まぢうけ奉らせ給ふさま、みこしのいらせ給ふほどなど、見奉りつる殿たちの、かしこまり申させ給へば、なほ、國王こそ、日本第一の事なりければ、おもふに、おりおはしまして、阿彌陀堂の中尊の御まへに、つゐゐさせ給ひて、をがみ申させ給ひしに、なほなほ、佛こそ、かみなくはおはしましけれど、この會の庭には、かしこうけちえんし申して、道心をむ、いとど熟し侍りぬるとこそ、申され侍りしか。傍にゐられたりしなりや、まことに忘れ侍りにけり。

世の中の人申すやう、大宮、入道せしめ給ひて、太上天皇

の御位にならせ給ひて、女院となむ申すべき。この御寺に
戒壇たてられて、御受戒あるべきなれば、世の中のあまど
も、参りてうくべきなりとて、悦をこそなすなれ。この世繼
がおうなども、かかる事を、つたへ聞きて申すやう、おの
れもそのをりだに、まらかのすそ、そぎすてむとなむ、なに
かせいすると、かたらひ侍れば、なにせむにか、せいせむ。た
だし、さあらむ後には、わかからむめのわらはべ、もとめて
えさすばかりぞとなむいひ侍れば、わがめいなるをんな
ひとりあり。それを、今よりいひかたらはむ。いとさしはな
れたらむも、なさけなき事もぞあると申せば、それあるま
じき事なり、ちかくも、とほくも、身のためにおろかならむ

人を、いま更に、よすべきかはとなむ、かたらひ侍る。やりや
う、ころも、袈裟などのまうけに、よききぬ一二疋、もとめま
うけ侍るなりなど、いひて、さすがにいかにぞや、ものあは
ればなるけしきのいでくるは、女どもにそむかれむ事の
心ほそきにやとぞ見え侍りし。

榮花物語

浦浦のわかれ

かくて、祭はてぬれば、世の中に、いひささめきつる事ども、あるべきさまに、人人いひ定めて、おそろしうむつかし。内大臣殿も、中納言殿も、おぼしなげく。殿には御門をさして、御物忌まきりなり。宮の御前も、ただにもおはしまさねば、大かた、御心ちさへ、惱しう、苦しう、思さるれば、臥しがちに、て過させたまふ。かかる事ども、おのづから漏り聞ゆれば、あなあさまし、さやうの夢をも見ば、われいかにせむ。いかで、唯、今日明日、身をうしなふわざもがなど、おぼし歎けど、いかかはせさせ給はむ。この殿原、さても、いかなるべきに

かあらむ。さりとて、ただ今、身をなげ、出家入道せむも、いと誠におどろおどろしからむことは、遁るべきにもあらず。ただ、佛神こそ、どもかくもせさせ給ふべきとて、珠數をはなたず、つゆ、物もきこしめさで、歎きあかし、思ひくらしたまふ。

内には、陣に、左衛門尉惟時、肥前前司頼光、周防前司頼親などいふ人人、皆これ、満仲、貞盛がうまごなり。おのおの、兵士ども、數えらず多くさぶらふ。春宮の帶刀や、瀧口やなどいふものども、夜晝侍ひて、關をかためなどして、いと、うたてあり。世には、大あなぐりといひつくるも、いとゆゆし。年比、天變などして、兵亂など占ひましつるは、この事にこそあ

りけれど、萬の殿ばら、宮ばら、さるべき用意せさせ給ふ。物の數にもあらぬ里人さへ、萬に、どもせば、山に入らむとまうけをし、ゆゆしき頃のありさまなり。北の方の御せうとの明順、道順の辨などいふ人人、あな心う、さは、かうにこそ世はあめれ、いかがせさせ給はんずるなどましさわげど、露かひあるべき事にもあらず。殿の内に、年比、曹司して侍ひつる人人、とありとも、かかりとも、君のなくならせ給はむままにこそはと思はで、萬を、こぼちはらひ、こぼめきののしりて、出で運び騒ぐを見るに、いみじう心ぼそし。されど、さなど、制し給ふべきにもあらず。萬の人のみ、思ふらむ事を、耻しういみじう思さるる程に、世の中にある檢非違

使のかぎり、この殿の四方にうち圍みたり。おのおの、えもいはぬやうなるもの、立ちこみたるけしき、道おほぢの、四五町ばかりのほどは、ゆききもせず。いと、けおそろしき、殿の内の氣色有様ども、いはむ方なく騒しければ、寢殿のうち、おはしましある人人多かれど、人おはするけはひもせず。あはれに悲しきに、かかるあやしの者ども、殿の内にうち廻りつつ、ここかしこを見騒ぐけはひ、えもいはずゆじげなるに、物のはざまより見出だして、あるかぎりの人人、胸ふたがり、心地いといみじ。殿今は、遁れ難きことにこそはあめれ、いかで、この宮を出でて、木幡に参りて、近うも、遠うも、遣さむ方にまかるわざせむと、おぼしの給はず

るに、このものども、たちこみたれば、おほろげの鳥けだものならずば、出で給はむ事かたし。夜中なりども、なき御かげにも、今一度参りてこそは、今はのわかれにも、御覽せられめど、いひ續け、の給はするままに、えもいはず、大きに、水晶の玉ばかりの涙、つづきこぼるる、見奉る人、いかがは安からむ。母北の方、宮の御前、御をぢの人人、例の涙にもあらぬ涙出できて、この怖しげなるものども、宮の内に、入り亂れたれば、檢非違使（い）いみじう制すれど、それにもさはるべき氣色ならず。かかる程に、かく亂りがはしきものの中どもを、かきわけ、さる方に、うるはしくさうぞきたるもの、南おもてに、只参りにまゐる。こは、何しにかと思ふ程

に、宣命といふもの讀むなりけり。聞けば、太上天皇をころし奉らむと志たる罪一つ、御門の御母后をのろはせ奉りたる罪一つ、おほやけより外の人、いまだ、行はざる太元の法を、私に隠して、行はせ給へる罪により、内大臣を筑紫の帥になして流し遣す。又、中納言をば、出雲權守になして、流し遣すといふことを、讀みののしるに、宮の内の上下、聲をどよみ、泣きたる程の有様、この文よむ人も、あわてにたり。檢非違使どもも、涙を拭ひつつ、哀に悲しう、ゆゆしう思ふ。そのわたり、近き人人、皆聞きて、門をばさしたれど、この御聲にひかれて、涙とどめがたし。さて、今は、出でさせ給へ、日暮れぬ日暮れぬと、責め誓り申せど、すべて、どもかくも、い

らへする人なきよしを奏せさずれば、などてさるべき事にもあらず、只、せめよどのみ、頻に宣旨くだるに、かくて、この日も暮れぬれば、内大臣殿、故殿、今宵、誘ひてゐて出ださせ給へど、おぼし念ぜさせ給ふ御志るしにや、そこらの人さばかりいひ誓りつれど、夜中ばかりに、いみじう寢入りたれば、御をぢの明順ばかりと、御供に、人二三人ばかりして、ぬすまれ出でさせ給ふ。御心の中に、大願をたてさせ給ふ、その志るしにや、事なく出でさせ給ひぬ。それより木幡に参り給へるに、月明けれど、此所は、いみじうこぐらければ、その程ぞかしと思しはかりおはしまいつるに、かの山近にては、おりさせ給ひて、くれぐれと、分け入らせ給ふに、

木の間より、もり出でたる月を志るべにて、卒都婆、釘ぬきなど、いと多かる中に、これは、去年のこの頃の事ぞかし、されば、少し白う見ゆれど、その折から、人人、あまたものし給ひしかば、いづれにかと、よろづ、たづね参りよらせ給へり。そこにて、よろづを言ひつづけ、伏しまるび泣かせ給ふ。けはひに驚きて、山の中の鳥獸も、聲をあはせて泣きののしる。物のあはれをしる。哀に悲しういみじきに、おはしましししをり、人よりけにめでたき有様をど、思しおきてさせ給ひしかど、自らの身の程、ゆゆしく侍りければ、今は、かくて、都離れて、知らぬ世界にまかり流されて、又、かやうになき御かげにも、御覽ぜらるるやうも侍らじ、自ら、怠ると思

ひ給ふる事侍らねど、さるべき身の罪にて、かうあるまじきめを見侍れば、いかで、何地も罷らで、今宵のうちに、身を失ふわざを志して、かなど、なき御かげにも、御面伏と、後代の名を流し侍る、いと悲しきことなり。助けさせ給へ。中納言も、同じく流しつかはせど、同じ方に、だに侍らず。方方に罷り別るる悲しきこと、又、ゆゆしき身をば、さるものにて、宮の御前の、月比、ただにも、おはしまさぬに、かかるいみじき事により、つゆ、御湯を、だに、聞しめさで、涙に、洗みて、おはしまししを、いみじう、ゆゆしう、かたじけなく侍り。おはします陣の前は、かさを、だに、ぬぎて、こそ、渡りは、べれ。かく、えも、いはぬもの、おはします廻りに、立ちこみて、御簾

をも、ひきかなぐりなどして、あさましう、かたじけなくて、おはしますとも、もし、たまたま、たひらかにおはしまさば、御産のをり、いかに、せさせ給はん、ずらむ、かひなき身だに、行末も、知らず、まかりぬれば、猶、かの御身、離れさせ給はず、たひらかに、と、守り奉らせ給ひて、又、かけまくも、かしこき公の御心ちにも、又、女院の御夢などにも、この事、咎なかるべきさまに、思はせ奉らせ給へなど、泣く泣く、申させ給ふままに、涙におほれ給ふ、聞く人さへ、なき所なれば、明順、聲も、惜まらず、泣きたり、やがて、それより、押しかへし、北野に参り給ふほどの道、いこ遙に、辰巳のかたより、戌亥の方さまに、赴かせ給ふ。参りつかせ給へれば、鳥啼きぬ。そこにて、又、

なくなく、いみじき事どもを申し續けさせ給ふに、この天神に、御誓たて、ざえおはする人にて、申し給ふ事かぎりなし。宮人もや驚くと、急ぎ出でさせ給ふ程に、むげにあけぬ。いかにせむと、彼所にいらせ給はむ程もさわがし。猶、このわたりに、どかく、暮させ給ひて、夕方とおぼす程も、彼所の御有様どもあはれにうしろめたく思せど、猶、まばし、やすらはむと思して、右近の馬場のわたりに、滞らせ給ふ程に、宮には、昨日暮れにしことだにあり、今日とくとくと宣旨まきりなり。

さても、中納言は、あるけふきま侍り、帥は、すべてさふらはぬ由を奏せさすれば、あるまじき事なり、宮をさるべく隠

し奉りて、塗籠をあけて、くみれのかみなどをも見よとある、宣旨まきりにそふ。御塗籠、あけ侍らむ、宮さりおはしませど、檢非違使申せば、今は、すぢなしとて、さるべく、几帳など立てて、淺はかなるさまにておはしませ、檢非違使どもものみにもあらず、えもいはぬ人具して、この塗籠を、わりののしる音も、あさましう、ゆゆしく、心憂し。さは、世の中は、かくあるわざにこそありけれど、目もくれ心も惑ひて、涙だに出でこず。中納言も、我にもあらぬさまにて、薄鈍の御直衣、指貫など着給ひて、あさましくて居給へれば、人人畏りて、近うもえまゐりよらぬに、この手のあやしものども、入り亂れて、志得たる氣色どもぞあさましういみじ

き。さて、あけたれども、夢におはせぬよしを奏せさず、出家したるにか、さるにても、只今は都の内を離るべきにあらず、よくよく、あされあされと、宣旨まきりなり。檢非違使ども、かつは、なくなく、いみじう思ひながら、宣旨のままにするに、おはせねば、いとあさましき事にて、帥なしとて、そのあたりさらず、夜晝守るべきよしの宣旨、頻にあり。かくて、今日も暮れぬ。いとあさましき事なり。檢非違使ども、事あやまちたらば、皆科あるべきよし聞くにも、その夜一夜、いもねじと、思ひ騒ぐ程に、酉の時ばかりに、あやしの綱代車のところの人にも、おぢぬさまなるが、二三人ばかり供にて、この宮をさして、ただ來に來るに、怪しくなりて、この檢

非違使どもの、このあかきぬなど、着たるものども、ただよりによりて、なにの車ぞ、只今、かかる所に來るはとて、轅に、さどつけば、あらずや、殿の、木幡に參らせ給へりしが、今歸らせ給ふなりといふを聞きて、このものども、皆去りぬ。御車、御門のもとにて、昇きおろして、内大臣殿、おしさせ給ひぬ。檢非違使ども、皆、おりて土に並み居たり。見奉れば、御年は、只今廿二三ばかりにて、御容貌とどのほり、太り清げにて、色あひ、誠に白くめでたし。かの光源氏も、かくやありけむと見奉る。薄鈍の御ぞの、なよよかなる三つばかり、同じ色の御單の御直衣、指貫同じさまなり。御身の才も、容貌も、この世の上達部には、餘り給へりと聞ゆるぞかし。あたら

ものをあはれに悲しきわざかなと見奉るに、涙も止めがたうて、皆泣きぬ。乗りながらも、入らせ給はで、宮のおはしませば、われひとりは、猶、畏り給へるも、いと悲し。

さて、おはしましぬれば、帥、木幡に參らせたりけるが、只今なむ歸りて候ふと奏せさすれば、むげに夜にいりぬれば、今宵は、能くまもりて、明日、卯の時にある宣旨あり。されば、夜一夜、いもねでたち明したり。宮の御まへ、帥殿、母北の方、ひとつに、手を取りかはして、惑はせ給ふ。はかなく、夜も明けぬれば、今日こそはかぎりど、たれもたれもおほすに、立ち退かむともおほさず、御聲もをしませ給はず。いかに、いかに、時なり侍りぬと、責めののしるに、宮の御まへ、母北

の方、つとどらへて、更にゆるし奉り給はず。かかるよしを奏せさすれば、几張ごしに、宮の御前を引き放ち奉れど、宣旨まきれど、檢非違使どもも人なれば、おはします屋には、えもいはぬ者ども、のほり立ちて、塗籠をわり、詈るだに、いみじきを、又、いかでか、宮の御手をひき放つ事はあらむと、いと怖しう、思ひまはして、身のいたづらにまかりなりて、後は、いと便なかるべし、とくどくと、せめ申せば、すちなくて、出でさせ給ふに、松君、いみじう、慕ひ聞えさせ給へば、かしく構へて、ゐて、隠し奉りて、御車に、柑子、橘、ごき一つばかりを、袋に入れて、筵張の車に乗りたまふ。宮の御方を、いとかたじけなく思せど、宮の御前、母北の方も、續き立ち給

へれば、近く、御車寄せて乗らせ給ふに、母北の方、やがて、御腰を抱きて、續きて乗らせ給へば、母北の方、帥の袖をつと、捕へて乗らむと侍りと、奏せさせれば、いと便なき事なり、引き放ちてとあれど、離れ給ふべき方見えず。唯、山崎まで、いかむいかむと、ただ乘りに乗り給へば、いかがはせむ、すぢなくて、御車引き出だしつ。長徳二年四月廿四日なりけり。帥殿は、筑紫の方なりければ、未申の方におはします。中納言殿は、出雲の方なれば、丹波の方の道よりとて、戌亥さまにおはする。御車ども引き出づるまゝに、宮は御缺して、御手づから、尼になり給ひぬと奏すれば、あはれ、宮は、ただにもおはしまさざらむものを、かく物思はせ奉る事と思

し續けて、涙こぼれさせ給へば、忍びさせ給ふ。昔の長恨歌の物語なども、かやうなる事にやど、悲しう思さるる事かぎりなし。この殿ばらのおはするを、世の人人の見るさま、少少の物見にはまさりたり。見る人、涙を流したり。あはれに悲しなどはよるしき事なりけり。

中納言殿は、京出ではて給ひて、丹波ざかひにて、御馬に乗らせ給ひぬ。御車は返し遣すとて、年比、仕はせ給ひける牛飼童に、この牛は、我形見に見よとて、たべば、童、伏しまるびて泣くさま、まことにいみじ。御車は、都に來、御身は、知らぬ山路に入らせ給ふほど、いみじき。大江山といふ所にて、中納言、宮に御文かかせ給ふ。ここまでは、たひらかにまう

で来て侍り、かひなき身なりとも、今一度参りて御覽せられて、やみ侍りなむと、思ひ給ふるになむ、いみじう悲しう侍る、御有様ゆかしきなりと、哀に書きつけ給ひて、

うき事を、おほえの山と、知りながら、

いとどふかくも、いる我身かな。

となむ思ひたまふるなど書き給へり。宮には、哀にかなしう、よろづを思し惑はせ給ひて、物もおほえさせ給はず。ただならぬ御有様にて、かくさへならせ給ひぬる事と、かへすがへす、内にも、女院にも、いみじく聞し召しおほす。

帥殿は、その日のうちに、山崎關戸の院といふ所にぞ留り給へる。この御供には、さるべき檢非違使ども、四人ぞ仕う

まつりたりける。その手のものどもの、御車に附きて参るぞ、あはれにゆゆしき。中納言の御供には、左衛門尉延安といふ人は、長谷の僧都のはらからの檢非違使なり。それぞ仕うまつりたりける。あさましき事、盡きもせず。關戸の院にて、帥殿は、御心ちあしうなりければ、御供の檢非違使ども、かうかう、帥は、みだり心ちあしとて、ためらひさぶらふ母北の方も、やがて、つとどらへて、またここになむと、奏せさすれば、とくとく、その心ちつくるひやめて、速に下すべきよし、ならびに、母北の方、速にあげ奉れと、宣旨あるに、中納言、宮の御ありさまも、思しやり、かの母北の方をも、思しやらせ給ふに、いみじうて、女院も、内も、遙なる御ありさま

を、いと、心苦しうおぼして、大殿にも、この事宜しかるべく
など、院に、せちに申させ給ひて、帥殿は播磨に、中納言殿は
但馬に留り給ふべき宣旨下りぬ。この事を、宮はつかに聞
かせ給ひて、いみじう嬉しども、おろかに思し召さるるも、
あはれにいみじき御事なりかし。關戸の院にて、播磨に留
り給ふべきになりぬれば、いみじう嬉しう思されて、御母、
早う都へ歸らせ給ひね。こよなう近き程に、罷り留りぬれ
ば、いと嬉しう侍り。又、あやまち侍らねば、さりとも召し還
さるやうも侍りなむなど、泣く泣く、聞え慰めさせ給ひて、
あげ奉らせ給ふ。我は、播磨へおはす。かたみに、遠ざからせ
給へば、いみじう悲しうなども世の常なり。さて、歸らせ給

ひて、うへは、宮の御有様の變らせ給へるに、又、いとどしき
御涙さくりもよよなり。

帥殿は、播磨におはすとて、ここは、明石となむ申すといふ
を聞し召して、かくなむ。

物思ふ、こころのうちし、くらければ、

あかしの浦も、かひなかりけり。

いでや、物の覺ゆるにやと、我心にも、にくく思さるべし。

中納言殿、こと方へおはすらむを、などか、同じ方にだにあ
らましかば、何事もよからましと、あやにくくなる世を心憂
く思されて、

白浪は、たてどころもに、かさならず、

明石もすまも、おのがうらうら。

といふ古歌をかへさせ給へるなるべし。

かたがたに、別るる身にも、似たる哉。

明石もすまも、おのがうらうら。

とぞ思されける。中納言殿は、旅のやどりの露けく思されければ、

さもこそは、都のほか、に、旅寝せめ。

うたてつゆけき、草まくらかな。

かくて、但馬におはし着きぬれば、國の守、公家の御定より外に、さし進みて、仕うまつる事多かり。中納言殿は、心の愛敬つき給へれば、誰もいみじうぞ仕うまつりける。おはし

着きぬれば、延安都へ還り参るに、いとど、心細げなる御有様の心苦しさに、わが子を供に率ていきたりける友助といふを留めて、御心に随へといひ置きて、我は、のほりにけり。播磨にもあるべきやうに、まつらひすゑ奉り置きて、御供の檢非違使ども還り参りぬ。いと遙なりつる程の御供に、よそよその人も、哀に嬉しう思ふめり。

松右の戀ひ聞え給ふぞ、いみじうあはれなりける。宮には、つきもせぬ事を思し歎くに、御腹も高くなりもていきて、ただ、あらぬ事のみ、おぼし知らるるにも悲しうなむ。播磨よりも、但馬よりも、うち續き、御使まきりて参る。母北の方は、そのままに、御心ち悪しうて、物もまゐらで、年比の御念

誦も懈怠して、哀に、口をしき御有様を、御はらからの清昭阿闍梨など、明暮聞ゆれど、今は、思しなほるべきやうも見えず。洗み入りておはすれば、いかにと心ほそきを、宮の御前にも、御方方にも、思しなげく。二位新發意は、たゆみなき御いのりの志るし、さりともさりともと思ふべし。いづこにも、そのままに、皆御齋にて、明暮佛神を念じ奉り給ふ。こにかしこに通ふ御文のうちの言の葉ども、いづれも哀に悲しきに、この北の方は、洗み入り給ひて、いとたのもしげなくなりませ給ふ。唯世ととももの御事には、殿に對面して、死なむ死なむとぞねごとにも志給ふ。帥殿を聞え給ふなるべし。世はかなければ、かく思しつつ、ともかくもお

はせむは、いみじき事など、このぬしたちの聞ゆるに、ざりとて、いかがはあるべからむとて、九十月の程になりぬれば、宮の御事、やうやう、近くなりぬるに、たのもしく思す人の、かく志づみ入り給へるに、いとど、心細く思さるる事盡せずなむ。この御心ちのありさま、怠り給はむ事ありがたげなるに、ただ、朝夕は、あな戀しより外の事を、の給はばこそあらめ。これを聞き給ふままに、但馬にも、播磨にも、いみじう思しおこす。母の北方、うちなき給ひて、
よるの鶴、みやこのうちに、こめられて、

子をこひつつも、なきあかすかな。

いかにと、人人聞ゆれば、あらずといひまぎらはし給へり。

古今集

初瀬に詣づるごとに、宿りける人の家に、久しくや
どらで、ほどへて後に、いたれりければ、かの家のあ
るじ、かくさだかになむ、やどりはあると、いひ出だ
して侍りければ、そこにたてりける梅の花を折り
てよめる。

紀 貫 之

人はいさ、こころもまらず。ふるさととは、

花ぞむかしの、香に匂ひける。

人の家にうゑたりける櫻の花、咲きはじめてたりけ
るを見てよめる。

おなじ人

ことしより、春まりそむる、さくら花、

散るといふ事は、ならはざらなむ。

歌奉れと仰せられし時に、よみて奉れる。

おなじ人

櫻ばな、さきにけらしも、あしびきの、

山のかひより、見ゆるまらくも。

あひ知れりける人の、まうできて、歸りにける後に
よみて、花にさしてつかはしける。

おなじ人

ひとめ見し、君もやくると、さくら花、

今日はまち見て、ちらばちらなむ。

ならのみかどの御歌

おなじ人

ふるさととなりにしならの都にも、

いろはかはらず、花はさきけり。

題まらず

讀人まらず

春ごとに、花のさかりは、ありなめど、

あひ見むことは、命なりけり。

山寺にまうでたりけるによめる。

紀貫之

やどりして、春の山邊に、ねたる夜は、

ゆめのうちにも、花ぞ散りける。

卯月に、さける櫻を見てよめる。

紀利貞

あはれてふ、ことをあまたに、やらじとや、

春におくれて、ひとり咲くらむ。

寛平の御時、きさいの宮の歌合の歌。

紀友則

さみだれに、物おもひをれば、ほととぎす、

夜深くなきて、いづち行くらむ。

秋立つ日、うへのをのことも、加茂の川原に、川せう

えうまけるともにまかりてよめる。

紀貫之

川風の、すずしくもあるか、うちよする、

浪とともにや、あきは立つらむ。

題志らず

讀人志らず

志ら雲に、はねうちかはし、とぶ雁の、

かずさへ見ゆる、あきの夜の月。

是貞のみこの家の歌合の歌。壬生 忠岑

山ざとは、秋こそことに、わびしけれ。

鹿のなくねに、めをさましつつ。

題志らず

讀人志らず

なきわたる、雁の涙や、おちつらむ。

ものおもふやどの、萩の上の露。

北山に、紅葉折らむとて、まかりける時、よめる。

紀貫之

見る人も、なくて散りぬる、おく山の、

紅葉はよるの、にしきなりけり。

なが月のつごもりの日、大井にてよめる。

紀貫之

夕月夜、をぐらのやまに、なく志かの、

こゑのうちにや、秋はくるらむ。

年のはてによめる。

在原元方

あらたまの、年のをはりに、なる毎に、

雪もわが身も、ふりまさりつつ。

年のはてによめる。

春道列樹

昨日といひ、今日とくらして、飛鳥川。

ながれてはやき、月日なりけり。

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十賀去ける時に、四季の繪かけるうしろの屏風にかきたりける。

凡河内躬恒

すみの江の、松を秋風、ふくからに、

こゑうちそふる、おきつ去ら浪。

小野ちふるが、陸奥の介にまかりけるとき、母のよめる。

たらちねの、親のまもりと、あひそふる、

こころばかりは、關などどめそ。

さきのおほきおほいまうち君を、白川のあたりに

おくりける夜、よめる。

素性法師

血のなみだ、おちてぞたぎつ。白川は、

君が代までの、名にこそありけれ。

堀川のおほきおほいまうち君、身まかりにける時に、深草の山にをさめてける後に、よみける。

上野岑雄

深草の、野へのさくらし、こころあらば、

今年ばかりは、すみぞめにさけ。

紀友則が身まかりにける時、よめる。

紀貫之

明日志らぬ、わが身とおもへど、くれぬまの、

今日は人こそ、悲しかりけれ。

深草の帝の御時に、藏人の頭にて、よるひる、なれつ
かうまつりけるを、諒闇になりければ、さらに、世
にもまじらずして、ひえの山に登りて、かしらおろ
してけり。その又の年、みな人、御ぶくぬぎすて、ある
は、かうぶり給はりなどよるこびけるを聞きてよ
める。

僧 正 遍 昭

みな人は、はなの衣に、なりにけり。

こけのたもとよ、乾きだにせよ。

病にわづらひ侍りける秋、ここのたのもしげな

く、おぼえければ、よみて、人のもとにつかはしける。

大 江 千 里

もみぢばを、風にまかせて、見るよりも、

はかなきものは、命なりけり。

題 志 ら ず

讀 人 志 ら ず

おそく出づる、月にもあるかな。あしびきの、

山のあなたも、をしむべらなり。

題 志 ら ず

讀 人 志 ら ず

われ見ても、久しくなりぬ。住吉の、

岸のひめまつ、いくよへぬらむ。

題 志 ら ず

讀 人 志 ら ず

世の中は、なにかつねなる、あすか川。

昨日のふちぞ、今日は瀬になる。

題志らず

讀人志らず

山里は、物のさびしき、こどこそあれ。

世のうきよりは、すみよかりけり。

山の法師のもとへつかはしける。

凡河内躬恒

世をすてて、山にいる人、やまにても、

なほうき時は、いづち行くらむ。

惟喬のみこのもとに、まかり通ひけるを、かしらお
るして、小野といふ所に侍りけるに、正月に、どぶら

はむとて、まかりたりけるに、ひえの山の麓なりけ
れば、雪いと深かりけり。あひて、かのむろにまかり
いたりて、をがみけるに、徒然として、いと物かなし
くて、歸りまうできて、よみて送りける。

在原業平朝臣

わすれては、ゆめかごぞおもふ。おもひきや、

雪ふみわけて、君を見むとは。

題志らず

讀人志らず

わがいはは、三輪の山もこ、こひしくば、

こぶらひきませ。松たてるかご、

題志らず

讀人志らず

風ふけば、おきつゝあらなみ、たつた山、

夜半にや君が、ひとりこゆらむ。

中等國文讀本卷十終

明治三十二年一月廿五日訂正六版印刷
明治三十二年一月三十日訂正六版發行
明治三十三年十一月十五日廿五版發行

定價表	
三、三	各貳拾錢
五、六	各貳拾貳錢
七、八	各貳拾貳錢
九、十	各貳拾貳錢

著者

落合直文

東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地

發行者

三樹一平

東京市神田區三河町二丁目十六番地

發行者

鈴木友三郎

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者

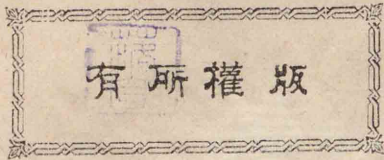
新井豐造

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷所

明治印刷所

明治三十三年二月九日
中等學校用文部省檢定濟



發行所

東京市神田區錦町一丁目

明治書院

關西專賣

大阪市東區備後町四丁目

吉岡平助

